

幕臣博物学者鶴田清次とその資料

Seiji Tsuruta, Naturalist to the Shogun, and His Research Materials
HICUCHI Takehiko

樋口雄彦

はじめに

本稿は、国立歴史民俗博物館が平成二四年度に購入・収蔵した「博物学者鶴田清次関係資料」をめぐって、その内容の一部を翻刻や写真によって紹介するとともに、この資料群を残した鶴田清次という人物について解説するものである。

「博物学者鶴田清次関係資料」のリストは、表1として掲げた。史料の翻刻は、本稿の後半部分にまとめて掲載した。

ところで、鶴田清次はほとんど無名の人物である。しかし、後述するように、シーボルトの弟子にして日本初の理学博士伊藤圭介、日本の博物館・動物園の父田中芳男という、近世から近代への移行期において博物学・博物学の展開に大きな役割を果たした師弟のすぐ近くに身を置いた。また、本草学や園芸を好んだ江戸の旗本・御家人の系譜に位置し、やがて幕府や明治政府の行政機構の中でそれを自らの仕事とし、あるいは趣味として続けていったという一群の存在の一人である^{〔1〕}。

新旧時代のかげはしとなった伊藤や田中、あるいは明治の学術研究・産業振興・学校教育・社会教育といった諸分野に寄与したより若い世代の学者・官僚たちとは違い、高い地位に登ったわけでもなく、学界や政策において顕著な功績を残したとはいえないが、彼が学び実践したこと、また集め書き残したのものにはそれなりの意義があった。あるいは、彼のような存在そのものが、一八世紀以来の本草学に対する知的関心の高揚と開国・開港による国策としての殖産興業とが交差した、時代状況を反映したものであったといえる。

鶴田清次に関する既刊文献

鶴田清次について紹介された、既刊の人名辞典類は以下のものがある程度である。

まずは、国立公文書館所蔵・江戸城多聞櫓文書として残された履歴明細短冊である（『江戸幕臣人名事典』として公刊）。それから判明する履歴は以下の通り。鶴田清次郎は、卯年（慶応三年・一八六七）時点で

五一歳、高は七〇俵五人扶持、うち元高は五〇俵三人扶持、足高が二〇俵二人扶持。天保五年（一八三四）七月牧野靱負組御徒の養父鶴田権兵衛が病氣により暇願いを出し、同月一八日養父の跡へ御抱入を仰せ付けられた。文久二年（一八六二）閏八月二四日御徒一同が譜代を仰せ付けられ、席は学問所勤番の上とされた。元治元年（一八六四）二月二〇日開成所調役を仰せ付けられ、同日同所物産学出役介に任じられた。⁽²⁾

次は、静岡移住旧幕臣の履歴を集成した前田匡一郎氏の著作である。⁽³⁾同書は、『江戸幕臣人名事典』や官員録などを参考にしたと思われるが、

鶴田清次（旧名清次郎）は、文化一四年（一八一七）の生まれで、養父権兵衛は御徒、御徒や開成所調役を経て、維新後は駿河に移住、静岡藩士となり、安倍郡北安東村四二に居住、明治二年（一八六九）時点で静岡病院御薬園掛、一〇年（一八七七）時点では内務省博物局御用掛準判任、一八年（一八八五）時点では農商務省博物局御用掛準判任だったと記される。

これらは、いずれも断片的なものにすぎなかったといえよう。

一方、一般には広く出回らなかったものであるが、子孫によってまとめられた独自の印刷物が存在した。馬場信夫編『伝記鶴田清次郎』（謄写版、内題「和歌の部」、一七頁）、同『伝記鶴田清次郎 武術の部 付水泳書』（一九六八年、謄写版・表紙のみ活字、三一頁）、同『伝記鶴田清次郎 学問の部 博覧会御用日記』（一九六九年、謄写版・表紙のみ活字、六六頁）である。いずれも鶴田の略伝を紹介し、年譜を作成しつつも、史料の翻刻に主眼が置かれている。また、手書きの謄写版だった上記三種を活字化したものが、馬場信夫『かくてかくありき わが半生記 総集編』（一九九〇年、私家版）という書籍に再録されている。ただし、「博覧会御用日記」については、解説のみの掲載で、原文翻刻の収録は略されている。同書には、三種のほか、「御上洛御供道中日記」という史料翻刻が、昭和四九年（一九七四）に記された解説とともに収

録されているので、謄写版の冊子には四冊目があったらしい。なお、謄写版による三種の冊子は、歴博が収蔵した本資料群の中に含まれていたことから（資料番号119、120、121）、その存在を知ることができた。馬場信夫氏（故人）は、鶴田清次の娘ひさの孫、つまり清次の曾孫にあたる。このように、鶴田清次という人物については、関連文献が皆無だったわけではないが、ほとんど無名に近かったといえよう。本稿では、歴博が収蔵することになった本資料群にもとづき、鶴田とその事蹟をより明確にしてみたい。

判明した履歴

鶴田家は徳川幕府に仕えた御家人であった。戦国時代の古文書の写しがあるように（資料番号112）、先祖は武田家に仕えていたらしい。甲府に生まれた落合仁左衛門徳英が元文二年（一七三七）江戸へ出て鶴田と改姓し、御徒に召し抱えられ、幕臣としての初代となった。その後、尹清（歛助・直次郎）、重教（権兵衛）と続いた。

清次は、鶴田家の生まれではなく、重教の婿養子として四代目を継いだ立場である。幼名は鉄五郎、諱を信守といったが、鶴田家に入ってから、通称を清次郎、諱を尹房と改めた。清次郎を清次と改名したのは、明治五年（一八七二）のことである。子孫が作成した年譜では、文政元年、西暦一八一七年生まれと記されているが、文政元年は一八一八年であり、どちらが正しいのだろうか。実父は小十人組として一橋徳川家に仕えた馬場儀右衛門信周（新兵衛・久五郎）といい、その次男であった。実兄は馬場新兵衛信益といい、一橋徳川家の勘定所書物方をつとめたらしい。以上は、資料番号108の「鶴田系譜」、115の馬場家歴代メモなどによった。子孫が書いたメモ類には、信周を清次の兄とするものがあるが、混乱しているようだ。

前掲『伝記鶴田清次郎 武術の部 付水泳書』に付された年譜には、

天保一四年（一八四三）四月松平藤十郎組御徒に替わり、日光山御参詣のお供をつとめたとある。同年には妻於きちが死去した。弘化二年（一八四五）五月、右大将（家定）の橋場御成に際し勢子をつとめ、褒美として白銀一枚を下され、七月には永代橋際での水泳上覧でも帷子を褒美として下賜されている。嘉永二年（一八四九）には小金原鹿狩に勢子として参加、翌年には三代家光二百回忌の日光山参詣のお供をつとめた。これらの動向に関して、本資料群の中には記されているものが見当たらないので、かつては何か別の資料が存在したらしい。

万延元年（一八六〇）十一月一日、和宮様御下向のお供を申し付けられ、翌文久元年（一八六一）九月二日江戸出立、一〇月一日京都着、同月二〇日には京都を出立している。同三年（一八六三）には將軍家茂に随行し、再度上洛した。文久三年二月九日江戸出立から三月四日京都着までの「御上洛御供道中日記」（鶴田氏、横半帳、図入り）は電子複写が、また同年三月四日から四月一九日までの「在京中日記」（鶴田、横半帳、図入り）は原本が、年不明の「東海道名所記」（原本、図ばかりの横半帳）とともに、本資料群とは別に子孫の方の手に所蔵されている。⁴ いずれも各地の名所旧跡・風景・名産品など、少なからぬ挿図を盛り込んだものとなっており、鶴田の博物学的関心が表れている。なお、「御上洛御供道中日記」については、前掲『かくてかくありき わが半生記 総集編』に翻刻・掲載されている。

また、同年譜によれば、柔術は天保一二年（一八四一）起倒流免許、剣術は同一四年（一八四三）柳剛流免許を受けたという。ただし、このことは本資料群に含まれる文書には記されていないので、他に典拠とした別の資料があったのだろう。同じく年譜に安政四年（一八五七）高島流砲術免許とあるが、このことは、伊豆韭山の江川太郎左衛門家に伝来した「砲術門人姓名」⁵の御目見以下・小十人の部の中に、「安政二卯年九月十四日門入 同四巳年正月十九日目錄 御徒拾三番組鶴田清次

郎」と記された短冊が貼り付けられていることから裏付けられる。ただし、免許ではなく目錄である。

蕃書調所・開成所時代

そして、蕃書調所に入學し、物産学を学ぶこととなったのが文久二年（一八六二）四月のことであった。なお、蕃書調所は翌月に洋書調所と改称、さらに翌年八月には開成所と改称された。鶴田の物産学への関心は、この時急に生まれたものではなく、若い頃から育まれたものだったと考えたいが、今のところそれを明確に示す資料は見当たらない。

資料番号6「物産学入學姓名記」は本稿では史料1として翻刻した。以下、それに関して気付いた点を少し述べてみる。

文久二年一月一日入門の長田宗之助は、後に成島柳北の養子となった成島謙吉のことである。彼自身の手になる履歷書にも、文久二年「開成所二入りテ和蘭陀学及物産学ヲ修ム」⁶とある。成島謙吉の実父長田歙十郎（正美・帰郷）は後に砲兵差図役になった人であるが、「物産学入學姓名記」には、鶴田の次、文久二年五月一日に物産学入門したことが記されている。長田は親子で物産学を学んだということになる。帰郷は、維新後、『博物雑誌』第五号（一八七九年刊）に「菓業糖藏法」という論考を掲載している。静岡学問所五等教授を経て内務省・農商務省に勤務した謙吉には、『有益鳥類図譜』（一八九三年）といった著作もあり、ともに博物学的関心を持ち続けたらしい。

成島謙吉の実兄長田銑太郎（銑之助、一八四九～八九）も文久三年（一八六三）正月二三日に物産学入門している。彼は、その後横浜語学所でもフランス語を学び、幕府陸軍の士官となり、維新後は静岡学問所二等教授を経て、外務省・宮内省官吏となった。谷中靈園にある墓石には、「入開成所専修仏朗西語」と彫られているが、物産学という文字はない。

「物産学入学姓名記」からは、他に名前が知られた人物として、伊藤謙（謙三郎）、中野延吉、足立益之助、辻新次（鼎吉・理之助）、阿部喜任（樸斎・将翁・友之進）・春庵父子らをあげられよう。伊藤謙は、伊藤圭介の三男。中野は名古屋の人で、本資料では「厄介」となっているが、その後、伊藤圭介の五女小春と結婚し、伊藤家の婿養子となった。足立益之助は、宇田川榕庵の実弟足立栄建（足立長雋の養子）の子であり、やはり錚々たる蘭学者の家系に属する人であった。栄建は蕃書調所物産方出役をつとめていた。後に文部次官・男爵となった辻新次は、蕃書調所・開成所ではむしろ化学を学んだことで知られ、その伝記にも文久三年九月精煉方世話心得を拜命したことなどは記されているが、物産学を学んだとの記述はない。阿部喜任（一八〇五―七〇）は、文久元年（一八六一）咸臨丸の小笠原諸島派遣にも随行した本草家。春庵は喜任の嗣子阿部為任（友之進・碧海、一八四五―九三）のことである。

辻や阿部もそうであったが、物産学入門者には、幕臣のみならず、松本藩（松平丹波守）、掛川藩（太田総次郎）、福岡藩（松平美濃守）、鹿児島藩（松平修理大夫）、和歌山藩（紀伊殿）、水戸藩（水戸殿）、名古屋藩（尾張殿）など、諸藩の士も少なからずいた。鹿児島藩士種子島綱輔とは、慶応二年（一八六六）アメリカ・ボストンに留学し、後に吉田彦磨と名乗った種子島敬輔（一八四六―？）と同一人物ではないかと思われる。

鶴田の弟太郎次郎も兄と同じく開成所で物産学を学んだ。ただし、系図の書き方からすると、太郎次郎は清次の実弟ではなく、鶴田重教（権兵衛）の実子らしい。「物産学入学姓名記」には、文久三年九月二八日、二九歳の時に稽古願いを提出した旨が記されている。資料番号25の履歴明細短冊（本稿で翻刻した史料7）では、弘化元年（一八四四）昌平黌の素読吟味を受けた後、文久三年（一八六三）三月一日からは開成所で仏蘭西学・物産学を学び、九月二五日に物産学稽古人世話心得となっ

たとあり、日付が違う。

東京都立中央図書館が所蔵する「海雲楼博物雑纂」は、川上冬崖・高橋由一・中島仰山（船橋鋏次郎）・吉田修輔・伊藤利見（林洞・陪之助）・遠藤政徳（辰三郎・碓山）・近藤正純（清次郎）・曲淵敬太郎ら蕃書調所・開成所の画学局に属した人々が描いた植物・動物等の図がまとめて保存された資料群であるが、その中の「安政七年鈴藤氏於米利堅所写 草花写真図」（資料番号5126-4）は、文久三年（一八六三）一二月に開成所物産局にて鶴田が写したものであるとされる⁹。筆者も同図書館でその実物を閲覧した。表紙には「蕃書調所」の文字が印刷された罫紙が裏返しで使用され、全二七丁からなる。着色された草花が二八図収録され、個々の図には「安政七申年三月五日」「三月十五日」といった日付も記入されており、原図は咸臨丸で渡米した鈴藤勇次郎がアメリカ滞在中に描いたものだったことがわかる。しかし、表紙には表題とは別に「文久三年亥臘月写成 開成所物産局 鶴田清次郎持」と記されているものの、「鶴田清次郎持」の筆跡は他の文字とは異なり、墨の濃さも違う。また、「画」とか「写」ではなく、「持」と記されていることから、これは鶴田が描いたというよりも、所持していただけにすぎない可能性もある。

また、「海雲楼博物雑纂」の中には、他に「鶴田」の丸い朱印が隅に押されたミカン・ザボン・ダイダイ・ユズなどの図一九点が含まれる（資料番号5126-1-66-4～17）。これらを鶴田が描いたとみなす文献もある¹⁰が、その朱印が押された図の中には「遠藤辰三郎写」「曲筆」（曲淵敬太郎のこと）と記されたものが含まれることから、押印は鶴田が描いたことを意味するのではなく、彼の所蔵だったことを示すと考えられる。同じ朱印は、当館の鶴田清次関係資料の中にも見られる。

ただし、「海雲楼博物雑纂」の中には、「無葉樹二出ルタケ 九月十日頃なり」の文字と「九月十二日写 鶴田」の署名が入ったキノコの図があり（資料番号5126-1-57-2）、間違いなく彼自身も図を描いたことが

判明する。他に物産局員の作例には田中仙永のものがある。物産局での鶴田らは、伊藤・田中の下で外国の物産を実物や文献から研究し、国内の物産に関する調査・収集などを行うとともに、画学局とも共同しながら業務を遂行し、描画法をも習得していったと考えられる。

しかし、何といっても開成所時代の大きな仕事は、フランスでの万国博覧会への出品物の用意に従事したことである。鶴田がパリ万国博覧会に出品する動植物の標本収集のため、相模・伊豆・駿河へ出張した際の記録は、翻刻史料²として「慶応二年二月開成所物産方之者共伊豆相模駿河辺江被差遣候節取扱一件帳写」(資料番号20)を翻刻した。また、採集した動植物を図に描き記録した「豆相駿廻村動物写生図」(資料番号17)、「豆相駿廻村植物写真」(資料番号18)については、一部を写真で掲載するとともに、表2、表3としてすべての内容を配列順に一覧表にした。動物の写生図のほうには、「田中芳男輯・鶴田清次郎画」と明記されており、鶴田自身が絵を描く能力を持っていたことは明白である。植物のほうも彼の筆になるものであろう。

鶴田が描いた「豆相駿廻村動物写生図」を写し、田中が明治七年(一八七四)八月四日の前書を付した写本が、東京国立博物館に「豆相動物写生図」(資料番号・和98)という表題で所蔵されており、マイクロフィルムでの閲覧が可能である。田中の前書には、「此書ハ慶応三月より五月マデ相豆駿廻ノトキ相輯メ鶴田清次ノ画ク処ナリシヲ今之ヲ写シタルモノナレバ其真ヲ失スル所マ、アルベシ」とある。書き込まれた説明や日付の記載などにわずかな違いが見られるものの、図も文字もほぼ原本通りである。東京国立博物館の写本では「グミ」の説明箇所に、鶴田による明治二年七月四日付の補足が追記されているのは比較的大きな違いである。また、写本のほうは、用紙が版心に「大学南校」と印刷されたものとなっている。

また、九年(一八七六)に山田清慶が模写したという東京国立博物館

所蔵「豆相植物写生図」(和97)とは、もう一方の「豆相駿廻村植物写真」の写本ではないかと思われる。

三国への出張は、田中芳男・鶴田清次・阿部友之進の三名が命じられた。⁽¹²⁾この仕事は「虫捕御用」と言われたが、昆虫採集のため、捕虫網の代わりに魚用の網を使用したとか、ピンがないので木綿針や仕立て用の針で試したこと、虫だけでなく木や石など何でも集め、さらには温泉の水まで瓶詰めにし、すべて長持に入れて持ち帰ったなどと、田中芳男が回想録で語っている。⁽¹³⁾パリへ送った標本箱は五〇箱程度になり、博覧会終了後はフランス人に買い取られたというが、たぶん現存はしていないであろう。田中は「物産取調豆相駿廻日記」全五冊を記録として残したとされるが、現在は所在不明となっている。また、「採集した虫の目録も無く」と後に述べていることからすると、田中の手元には同様のものはなく、鶴田が保存した「豆相駿廻村動物写生図」と「豆相駿廻村植物写真」はパリ万博出品に関わる資料として極めて貴重なものといえよう。

翻刻した史料²は、廻村に際しての事務的な書類である。日程や行程、持参した道具類などが詳しく記録されている。

ちなみに、彼らを迎えた各地にはその動向が記録されたものが残存する。たとえば、駿河国富士郡大宮町(現富士宮市)を訪問した際の記録は、同地の素封家角田桜岳の日記に書き残されていた。以下に引用しておきたい。⁽¹⁴⁾

(慶応二年四月二九日条)

一 今ひる後中宿より役人足にて申来る

信州御持山支配 同物産学出役 水戸殿医師

千村平右衛門家来 田仲芳男 同物産世話掛り

開成所調役 阿部友之進

鶴田清次郎

上下六人昨夜由井宿泊、今廿九日大宮町泊りと云先ふれ参り候由申来る、直に町へ可下存候得共種々用向も有之

一 夕茶頃酒のむ、少しく眠らんとす、又中宿方使来る、かの御出役最はや中宿桂蔵方へ着被成候と申遣されたれば直にわれ参候と申遣ス
(同五月一日条)

一 今朝早く起る、朝飯後高セ隠居へ行、今般出役の容子をきくに本舁へ掛り候事のミの容子也、種々の蝶などをとらへ来りて水気を去り火にあふりて蝶などは羽をひろけて銀の針をうちてうすき重ね筥に入持帰るよしなりし、蝶のミならず種々のむしをもとらへ来りたる由、出役三人の衆に坐敷へ行、逢ふて小野蘭山先生文化度北口不二の麓にて薬草をしらべさせ候二千余種をとられ候事をわれ話シ、何くれ物産に拘りたる事共を咄ス、蝶など取る道具は始終持歩行也、五ツ過今日はしら糸の滝方風穴など見て村山泊りにいたし度とて長持分持等ハ村山へ町方直に遣シ、三人は上井出へ廻る、町役人三四人ハ高札方入浅間へ参詣し二の宮下迄送り行帰る

角田は洋学・国学にも造詣が深い地域の知識人であったが、鶴田らは行く先々でそのような人々と交流することと必要とする情報を手に入れたものと考えられる。本資料群のうち、資料番号19「伊豆誌稿 物産之部抜萃」22「山辺風雨論」は、この時の出張先で書き写したものであり、滞在した村の有力者宅で見せてもらったことが記されている。動植物の現物採集のみならず、文献収集に関しても旺盛な意欲で臨んでいたことがわかる。

資料番号21(翻刻史料3)「物産取調御用人馬継立帳」については全文翻刻をしなかったが、右に述べた五月一日の駿河国富士郡大宮町の箇所だけを抜き出せば、下記の通りである。

一人足三人

馬三疋

内式疋ヲ人足四人ニ代ル

右者大宮町より村山迄御継立仕候以上

寅五月朔日

大宮町

年寄

平左衛門^⑮

巡回の記録はまだ各地の地方文書に残されているであろう。武蔵国については、多摩郡新町村の名主が鶴田・阿部の人馬継立や休泊について宿村の役人あてに出された開成所布達について書き写したものが知られる^⑮。

その後の鶴田の仕事ぶりを示すものとして、資料番号14、15にある通り、慶応二年一月二五日、長田庄十郎との連名で、雑司ヶ谷の御鷹部屋空き地の利用について意見を具申している事実がある。本稿の翻刻史料4、5である。また、関連する図面としては、資料番号11、16が相当する。

なお、長田庄十郎は、資料番号6(本稿翻刻史料1)によれば、文久二年(一八六二)十一月九日に洋書調所物産学に入門し、一二月七日に世話心得に就いた人だった。明治八年(一八七五)十一月一日没、戒名は長元院殿義光日勇居士。息子の長田清蔵(正言、一八四六～一九〇四)も元治元年(一八六四)二月一六日に物産学に入門しているが、彼は維新後には海軍兵学寮・兵学校の数学教官になった^⑯。やはり父子で入門した長田欽十郎・銚太郎とは、菩提寺を同じくする一族であった。

静岡病院附御薬園掛

さて、資料番号24の履歴明細短冊からは、鶴田の維新後の動向が判明する。彼は、慶応四年(一八六八)七月一六日に鎮台府附物産掛りとなっており、つまり最初是新政府に仕え、朝臣になったようである。八月

二二日には川島宗瑞（宗熾か）に附属する御製薬掛りに任じられ、鎮将府附となった。しかし、同月二六日には病氣を理由に早くも辞任し、旧主である徳川家に帰属し、駿河府中藩（翌年静岡藩と改称）の藩士となったのである。駿府（静岡）移住後、「製薬薬園掛」に任命されたとあるが、年月日は明記されていない。ちなみに川島宗熾は明治元年十一月、陸軍医師から御製薬掛となり、国益振興のために駿河田中（現藤枝市）に御薬園を設置することを命じられ、田中城下の空き地、四番長屋が引き渡される⁽¹⁷⁾ことが藩内に布達されているので、やはり鶴田同様、朝臣を辞したことがわかる。

資料番号27、本稿翻刻史料8は、駿河府中藩（静岡藩）に出仕した際の辞令であるが、役名は「病院附御薬園掛」であり、役金は七〇両だった。辞令を交付した「平右衛門殿」とは中老戸川平右衛門（明治二年六月平太と改名）のことなので、この辞令はそれ以前のものであることが明らかである。

明治二年（一八六九）九月に木版で刷られた『静岡藩御役人附』（上中下三枚組）には、静岡病院のスタッフ中の末尾のほうに「御薬園掛鶴田清次郎」とある⁽¹⁸⁾。

明治三年（一八七〇）三月頃刊行の静岡藩職員名簿『静岡御役人附』（横型冊子）には、「御薬園掛 鶴田清次郎 鶴田太郎次郎」と記され、弟の太郎次郎が加わっている。なお、「島田太郎次郎」とする『静岡県史資料編16近現代一』（一九八九年、静岡県、一二九頁）は、翻刻ミスである。

そもそも駿府（正確には隣接する安東村）の御薬園は、徳川家康時代に「御持木林」と呼ばれていた場所を起源とし、創始されたものであるが、その後廃絶し、享保十一年（一七二六）に再興され、駿府武具奉行の管轄とされ、人參などが栽培された⁽¹⁹⁾。その面積は四二〇〇坪余だった。現在は、静岡市葵区に、昭和六年（一九三一）静岡市建立の「駿府薬園趾」の石碑が立つのみである。

御薬園は静岡市街からは離れた久能にもあったようで、藩内では以下のような文書のやりとりがなされ、病院の管轄から勤番組へ移管されたことがわかる。鶴田太郎次郎の名前も登場する⁽²⁰⁾。

（九月十一日、一翁殿より御右筆遠山鉦太郎を以竹次郎江御渡、御薬園之儀は手遠にて難行届候に付、返上地に相成候旨、且御取締筋之儀とも委細政事庁懸松平勘太郎より竹次郎江談有之）

久能御取締懸江

病院頭江

久能御薬園之儀申立之趣、も有之候に付、静岡勤番組之頭江可被引渡候事

静岡

勤番組之頭江

久能御薬園地其方支配勤番組居住地に被下候筈に付、病院頭より可被請取候。尤、久能 御山朱引内に付。取締筋之儀は、同所御取締懸申談可被取計候事
右之通相達候間可被得其意候事

（巳九月十三日、病院頭支配御薬園掛手伝鶴田太郎次郎持参。竹次郎立会之上、静岡勤番組肝煎久保大八江引渡御取締向之儀は大八より竹次郎江談有之）

久能御取締方

病院方

久能御薬園之儀に付。別紙之通、一翁殿被申渡候間今十三日静岡勤番組之頭江引渡申候。此段及御達候

巳九月十三日

病院頭江

久能御薬園之儀申立之趣も有之候に付静岡勤番組之頭江可被引渡候事
静岡藩の静岡御薬園時代に鶴田が具体的に何を行ったのか、詳細は不明であるが、唯一、資料番号26、本稿翻刻史料9、すなわち部下である御薬園附属出役稲富市郎（喜一郎・直）から鶴田兄弟にあてた明治三年五月三日付意見書が参考になる。駿河の鶴田を尾張の田中芳男と並び立つ物産学の泰斗であると持ち上げつつ、前年に発足した静岡御薬園の実態は、附属の者が八名、修行人が一五名にすぎず、五〇〇〇坪の園を有効利用するには人員不足である、せめて二〇名に増員し、それを五名ずつの四班に分け持ち場を定め、規則にのっとり運営してはどうかといった内容である。稲富は、大番や奥詰銃隊をつめた旧幕臣で、静岡宮ヶ崎の報土寺に寄留していたことがわかっているが、なぜか藩の職員録に名前は無い。

なお、後に人類学者・理学博士となった坪井正五郎は、静岡病院頭並（副院長）に就任した父坪井信良とともに静岡で幼少時代を送ったが、静岡に御薬園とて少なる植物園有りて鶴岡某氏管理し居れり。余屢々此所に至り植物培養の状を見、面白き事に思し、家に在りても小草を植ゑ、種子を蒔き、花実を画き、名の知れぬ草には何草と勝手なる名を命じ樂みとせり⁽²²⁾との思い出を自叙伝に残しており、「鶴岡」（鶴田の誤りであろう）の名も登場する。鶴田が担当した御薬園は、少年の博物趣味養成に多大な影響を与えたのである。

明治新政府への出仕

稲富の意見書は、「皇国」のためであり、外国と対等な立場になるためであると高尚な理想をうたっていたが、一地方政権としての静岡藩の物産振興策とその中での御薬園の役割は、きわめて限定的なものであり、幕府時代のやりがいとは比べるべくもなかった。その頃、田中芳男は大学南校物産局や文部省博物局などに奉職し、中央での活躍を続けていた。

やがて鶴田も、それまでの経験と知識・技能を活かした新たな一歩を踏み出すことになる。廃藩後、明治五年三月四日には博覧会事務局十三等出仕を拝命し、静岡から上京したのである。同六年には「澳国博覧会品物取扱」の御用のため駿遠三の三国を巡回し、一〇月四日に帰京した。以後、明治七年（一八七四）三月三十一日に「御人減」によって罷免されるまで、博覧会事務局に勤務した。その後、内務省・農商務省に御用掛として再び奉職し、博物局での仕事を続けた。静岡時代の中断をはさみ、再び中央政府で活躍の場を見出したことになる。

資料番号29「博覧会御用日記」（明治五年三月二〇日～七月二一日）は、東京出立から静岡滞在中までの期間の日記で、鶴田清次がウィーン万国博覧会のための調査目的で派遣された駿河・遠江・三河における、出張先でのようすが記されている。静岡から上京し、またすぐに古巣静岡での業務に派遣されたのである。この日記は、子孫である馬場信夫氏によって翻刻・印刷されたことがあり、それが資料番号120『伝記鶴田清次郎 学問の部 博覧会御用日記』（一九六九年）である。「かくてかくありき わが半生記 総集編」のほうには、分量が多いとのことで、本文の掲載は省かれている。本稿でも翻刻・掲載はしないこととした。

本日記から彼の行程を抜粋すると、三月二〇日東京発、一二日沼津着、二四日静岡着、四月一二日藤枝着、一三日掛川着、一四日浜松着、一六日岡崎着、一九日豊橋泊、二〇日浜松着、二五日静岡着、五月三日清水港泊、九日島田泊、一四日静岡着、一六日蒲原泊、一七日沼津泊、二〇日静岡着、二九日藤枝泊、六月一日浜松泊、三日豊橋泊、四日岡崎着、七日浜松着、一一日静岡着、二〇日見付泊、二二日岡崎着、二五日袋井泊、二七日静岡着といった具合であり、静岡を基地としながら浜松（浜松県）や岡崎（額田県）へも足を延ばし、各地をめぐるしく行き来して調査を行ったことがわかる。記された内容には、茶、焼物、石材、鉱物資源、葛布、寄木細工、籠細工、絞り木綿、紙漉き、油桐、砂糖、わ

らび粉、タバコといった産物とその製法・職人などに関する情報、さらに鳥・魚・貝・海藻・ヘビ・蝶・山蛭・ミミズといった生物、名木、奇石、化石、薬泉、寺社、古物、祭礼、葬送方法など、ありとあらゆる事柄が筆記されている。幕末の調査旅行との違いは、人力車・陸運会社や写真撮影を利用している点であろう。

なお、「佐々井」「中島」と同道している旨が記されるが、佐々井半十郎と中島仰山のことであろう。立ち寄った沼津や原では、「榊氏江田中先生より御伝言、鯨之一条申通し」（三月二日）、「原宿なる植松与右衛門方ニ立寄て博覧会之事ニ付頼ミ申事も多かるへしと惣談」（三月二三日）、「植松与右衛門江田申談し置、沼津新井屋ニ泊ル、榊氏江立寄候処、東京江参り家内計也、伴氏江参ル、産業方江中藤新蔵案内ニ而織殿并陶器場参り石橋半平焼物取建地所見分、中藤新蔵石橋半平小島東一郎夜ニ入旅宿新井屋江来ル、陶器申付レンカ石出し可申談し置」（五月一七日）といった記述が残された。「田中先生」とは、鶴田にとっては一九歳も年下であったものの、蕃書調所で物産学の指導を受けた恩師であり上司でもある田中芳男のことである。榊氏とは、元開成所活字御用で沼津兵学校教授の榊綽（令輔・令一）のことであろう。植松与右衛門は、東海道原宿の素封家で、帯笑園と名付けられた自宅庭園で知られた。いずれも博物学的関心を持っていた人々である。沼津の織殿、陶器場とは、士族授産のため四年九月に設立された産業所会所の事業のひとつで、織殿は沼津町方町の元小人長屋に置かれ、機織りの講習を行った。陶器製造は沼津在の上香貫村八重坂で行われた。⁽²³⁾ 鶴田はレンガ製造などについて助言をしたらしい。

静岡学問所の御雇いアメリカ人教師エドワード・ワーレン・クラークの名前も登場する。越後島村（現焼津市）で産出する石油を調べてもらったという件（四月一二日）、さらに「教師米利監クラークより頼ミに付種物受取、附属之者ニ申付置」（五月一日）とあることから、植物の種

について依頼されたことがわかる。静岡病院でフランスの本草書を借用したことなども記され（五月二三日、七月六日）、旧幕府・静岡藩の人脈や備品を新政府での仕事に役立てようとしている。

鶴田の調査がどれだけ活用されたのかはわからないが、翌明治六年（二八七三）開催のウィーン万国博覧会では、静岡県から出品された賤機織、竹網代細工、寄木細工などが賞を受賞している。⁽²⁴⁾

東京での仕事と生活は新たな刺激をもたらしたのである。開成所でもに仕事をした伊藤圭介とは、静岡から上京後、交際が再開されたようで、伊藤の日記には、「窪田ハ十日過キカリニ可遣、草木図モノ也、八字過引取候由、一六休日ニて尋人モ此日ヨカラシ、タツ木静岡辺窪田此度探索ノ紀行カリ出シ持来」（明治六年二月二日）、「窪田ヘ行、本草写并此度駿遠三之紀行かり」（同年二月一六日）、「ヤウカン、海苔、窪田ヘ、（到）イモガラ、臘納セイ、窪田カ」（同年二月二四日）、「窪田ヘ此頃借用之図返し、又かり」（同年三月一日）、「鶴田清次郎来」（同年四月二八日）、「鶴田ヘも寄、重複之分図有之候ハ、放逐頼」（同年五月九日）、「鶴田ヘ此頃之西洋書残り候分余り居候ハ、御渡越可被下候」（同年一月一二日）、「鶴田清次来」（九年一月二日）といった記述が散見する。⁽²⁵⁾

著作

鶴田清次には著作といえるほどの業績はないものの、幾つかの刊行物にその名を残している。博物局が、日本の産物について図解すべく編集・発行した「教草」という色刷・一枚物のシリーズ、全三〇点のうち、第九『草綿一覽』（明治五年秋、鶴田・佐々井半十郎撰、中島仰山画）、第七『葛布一覽』（明治五年冬鶴田・佐々井半十郎撰、中島仰山画、八年一二月鶴田校訂）、第二十七『澱粉一覽』上・下（明治六年三月鶴田撰、七年六月武田昌次誌、服部雪斎画）という三種に、「鶴田清次撰」として解説文を付しているのである。⁽²⁶⁾ 草綿に関しては、説明文の中に「遠江

にて一ヶ年産出高 七万八千四百五十六貫目」「右ハ遠州上池川村池川平一郎外三人の説によりて記すものなり」とあり、鶴田・佐々井らの現地調査に依拠したものであることがわかる。葛布については、説明文の中に「葛亭製造人ハ掛川駅鈴木源平を第一とし」云々とあり、やはり静岡藩時代以来の地の利を活かした現地調査にもとづいたものだった。問屋の建物が市指定文化財となるなど、葛布は現在も掛川市の伝統工芸品として位置づけられている。

『葛布一覽』『澱粉一覽』に関しては、本資料群の中に同僚武田昌次からの鶴田宛書簡が一通あった。本稿では、史料10として翻刻した。「博覧会事務局」と印刷された罫紙に書かれたもので、現地調査に協力した小川太七（静岡上桶屋町の商人）・尾崎伊兵衛（静岡安西三丁目の商人）・鈴木陸平（掛川町年寄）・小川東一郎・池川平一郎といった人々に対して配布すべき印刷物の部数についての問い合わせである。なお、小川・尾崎・鈴木らの名前は、先述の「博覧会御用日記」にも登場し、鶴田が協力を仰いでいたことがわかる。他にも「博覧会事務局」罫紙を使用した資料番号43、44、45など、「教草」シリーズの草稿らしいものがある。ここで鶴田と名前を並べた佐々井半十郎と中島仰山について言及しておきたい。二人とも旧幕臣、元静岡藩士である。

佐々井半十郎（一八一四～九四）は、幕府代官を歴任した人で、維新後駿府に移住した。また、息子久和（栄太郎）は静岡藩開業方物産掛の任にあった。半十郎自身も、伊豆垂山の江川家から雁皮苗木を送つてもらい、酒井録四郎（御側御用人・家令）を通じて奥向へ申し立て、「御城内栄園」に植え付け、知事（徳川家達）もたびたびそれを視察したといった事実から（江川文庫所蔵・年不明三月二五日付江川太郎左衛門宛佐々井書簡）、静岡藩で勸業関係の仕事に従事した形跡がある。半十郎は茶斎と号し、静岡から上京後は浅草須賀町で静岡園と称する茶商店を営んだほか、東京茶業組合の役員をつとめるなど、業界に貢献した。『製

茶余話』（明治六年刊）という著作もある。息子久和も東京製茶会社を経営し、東京市会議員にも選出された⁽²⁷⁾。

中島仰山（歟次郎）は、開成所画学局で洋画の技法を身に付け、明治五年に博覧会御用掛になって静岡を離れるまで、徳川慶喜に油絵を指導した旧幕臣である⁽²⁸⁾。鶴田との関係も開成所時代にさかのぼるものだったろう。

鶴田は、明治一七年（一八八四）には旧師の故岩崎灌園（常正）の著作『本草図譜 山草部』を「補正」し、さらに小野職愨に校閲を担当してもらい、自身が出版人となって刊行している。植物の図版を多数掲載した同書は、活版・四六頁からなる。「九臯堂蔵版」となっているが、九臯堂とは鶴田の書齋号である。奥付に記された当時の住所は「東京下谷御徒町三丁目四十九番地」となっている。この本については、図が転写であるため「原本の趣が失われ」、灌園の肖像が石版画で掲載されたことだけが「この本の功績」であるとされるが、それは鶴田に対して少し酷な評価であろう⁽²⁹⁾。

さらに鶴田は、『博物雑誌』第四号（一八七九年、博物局）に八ページにわたる「岩崎灌園伝」を投稿している。ただし、自身との関わりについては全く言及がなく、この小文からは二人が師弟関係にあったのか否かはわからない。

本資料群の中には、植物関係の草稿類が多数含まれるが、それらは『本草図譜 山草部』、あるいはそれ以外の彼による研究の痕跡ではないかと考えられる。

なお、『東都花暦名所案内』（作者は仲田惟善、刊行は天保二年以降と推定）の版元「九臯堂蔵」も鶴田のことであると推測されており⁽³⁰⁾、それが確かだとすれば彼はかなり若い頃から植物・園芸に関心を抱いていたことになる。

おわりに

鶴田清次は、明治二五年（一八九二）十一月五日、七六歳にて死去した。戒名は、清澄院浄誉徹心居士。墓石は東京都杉並区梅里・西方寺にあったというが、現在は整理されてしまい存在しない。

鶴田家の実子だった先妻が亡くなった後、再婚したようで、後妻とめは明治一一年（一八七八）に亡くなっている。とめとの間には実子完太郎（安政元年生まれ）が誕生したが、早世した。そこで養子に迎えたのが、馬場信懷（一八五九～一九二七）であった。信懷は清次の甥ではないかと思われるが、その職歴は、以下の履歴書から判明する。養父清次と同様、博物学に関心を抱いていたようだ。残された資料に清次没後の年代の植物学関係の草稿類が含まれているのはそのためである。また、この履歴書以降は、長野県師範学校教諭などをつとめたことが判明する。

履歴

静岡県士族

鶴田信懷

安政六年三月廿二日生

明治十四年十二月廿八日

東京大学雇付日給金貳拾錢給与候事

但医学部博物学教場へ出勤申付候事

東京大学

同十六年五月二日

自今日給金貳拾五錢給与候事

同

同十七年十一月十日

自今月俸金八円給与候事 同

明治十七年十一月廿四日

器品課附属申付候事 東京大学

同年九月十二日

器品課兼勤ヲ解キ候事 同

同十九年三月十二日

理科大学雇付月給金八円給与

理科大学

同年十一月三十日

第一高等中学校雇

清次の義弟太郎次郎（容道）は、系図（資料番号11）に「嘉永二酉八月八日伴経三郎病氣ニ付御暇相願跡養子幼年ニ付有之御達看抱御譜代御抱人被仰付候」と記されていることから、一時、伴家の養子となったらしい。しかし、開成所には鶴田姓で入門しているので、実家に戻ったようである。清次とともに静岡病院御薬園に勤務したことは前述の通りであるが、その後の消息は不明である。

ところで、鶴田が残した本資料群の中には、近世後期の幕府医官にして本草学者である栗本丹洲（昌蔵・瑞見、一七五六～一八三四）が小動物ばかりを描いた図（資料目録1～5）が多数含まれている。含まれているというよりも、本資料群の内で大比重大を占める。鶴田と栗本とが直接面識があったのかどうかはわからない。しかし、ともにパリ万博出品のため昆虫・植物採集にあたった阿部喜任が栗本丹洲と友人関係にあったことは確かである。丹洲の孫にあたる外国奉行栗本鋤雲がパリ万博に派遣され、駐仏公使になったといういきさつもある。いずれにせよ、蕃書調所・開成所の物産方での業務を遂行する上で参考にすべく、先輩である栗本の作品を入手し、手元に置いたのかもしれない。あるいは明治後、博物局で参照にした可能性も低くない。

栗本が描いた博物図は、写本も含め、植物・昆虫・鳥類・魚介類等々、少なからぬ種類のものが現存する⁽³²⁾。ところが、小動物の図を集めた本資

料は、転写で流布した一部の図を除けば、多くは従来知られていた中にはなかったようである。つまり、新発見のオリジナル資料ということになる。とりわけ、転写による複数系統の写本が多く存在することが指摘されている栗本の博物図ではあるが、本資料は文字の筆跡から判断して栗本自筆であると認められ、第三者による写本ではない点も重要である。本稿ではほんの一部について写真を例示・掲載するにとどめた。全体の画像紹介は別の機会・方法によりたいと思う。また、描かれた動物図の内容的検討・考察は、今後、各専門分野からの研究に委ねなければならない。とにかく、栗本丹洲という江戸時代を代表する博物学者の作品をまとめた形で現代の我々に遺してくれたことは、鶴田清次の隠れた功績といえるだろう。

末筆ながら、鶴田家に関し情報・資料の提供をいただいた馬場信義様、福岡和子様、坂本清子様には心よりの御礼を申し上げる次第である。

注

(1) 後述する長田婦郷・成島謙吉・中島仰山ら以外にも、明治四年大学南校博物館が開催した博覧会(物産会)の出品者となった竹本要斎・内田正雄・森川眉山・田中仙永、博物学的関心を「茶農漫録」という膨大な雑記帳に書き残した林洞海、明治二年(一八八八)結成の博物知識交換の集まり多識会に参加した栗本鋤雲・木村二梅・浅田宗伯・宮内広、太政官地誌課を退職した後に骨格標本作製に携わった榊紳、内務省山林局に勤務しつつ『日本竹譜』といった著作を刊行した片山直人、内務省勸業寮に出仕した武田昌次(鳥羽・伏見の戦いで旧幕軍の副将をつとめた塚原昌義の改名か)、陸海軍奉行をつとめた旗本で維新後は開拓使や帝室博物館で天産物研究に従事した織田賢司(信愛)、その子で剥製技術の導入者となった織田信徳、開拓使の画工として鳥類標本模写を担当した牧野数江、官吏として北海道や鹿児島で勸業関係に携わり『麗海魚譜』を著した白野夏雲、地質を専門とし博物局天産課に勤務したその子白野己巳郎、『四季の花園』『梅譜』などの園芸書を著した小川安村、農学社を経営し西洋の農作物の普及に貢献した津田仙、開成所調役から内務省・農商務省の農政官僚となり著書『訓蒙博物問答』を持つ後藤達三、明治二年(一八八九)創立の日本園芸会の幹事となった平山成信、探検先の南洋の風物を描き残した鈴木経麿ら、多くの旧幕臣たちをあげるこ

とができる。文科系の博物学を志向した人々や好事家たちを加えればさらに多様な顔ぶれとなる。

- (2) 熊井保他編『江戸幕臣人名事典』第三卷(一九九〇年、新人物往来社)、九二―九三頁。
- (3) 前田匡一郎「駿遠へ移住した徳川家臣団」(一九九一年、私家版)、二二二頁、同「駿遠へ移住した徳川家臣団」第四編(二〇〇〇年、私家版)、二四八―二四九頁。
- (4) 福岡和子氏所蔵。
- (5) 公益財団法人江川文庫所蔵・資料番号27―2―1―3。
- (6) 松本和男「石上露子研究」第二輯(一九九七年、私家版)、一三〇頁。
- (7) 「信松先生錫爵録」(一九一二年)。
- (8) 種子島敬輔については、石附実『近代日本の海外留学史』(一九九二年、中公文庫)、塩崎智「アメリカ「知日派」の起源」(二〇〇一年、平凡社)。
- (9) 平野満「幕末の本草学者阿部喜任(樸斎)の年譜」(『参考書誌研究』第五六号、二〇〇二年)、四三頁。
- (10) 古田亮「油絵以前―高橋由一試論(上)―博物図譜と風景スケッチを中心に」(MUSEUM 東京国立博物館美術誌 第五二六号、一九九五年)、一一頁。
- (11) 前掲、「幕末の本草学者阿部喜任(樸斎)の年譜」、四三頁。同資料はマイクロフィルム化がされていないため、まだ筆者は原本確認をしていないが。
- (12) なお、田中・鶴田とともに廻村を命じられた「阿部友之進」については、将翁(喜任)本人であるとする説と、その子為任(友之進・春庵)であるとする説、父子ともに参加したとする説がある。第一説は「幕末の本草学者阿部喜任(樸斎)の年譜」、第二説は宮地正人「混沌の中の開成所」(『学問のアルケオロジ』、一九九七年、東京大学、四一頁)、第三説は田中義信「田中芳男十話・田中芳男経歴談」(二〇〇〇年、田中芳男を知る会、一二四頁)である。第三説によれば、一行は供も含め全六名であり、供三名のうち一人が為任だったという。本稿翻刻の史料2には、「水戸殿医師將翁伴 同物産学世話心得阿部友之進」とあり、父喜任ではなく息子為任のことであろう。為任は当時物産学世話心得に就任していたことになる。このことは、東京大学史料編纂所蔵「開成調所伺等留 乾」に、「水戸殿医師將翁伴阿部春庵 右之者平日学業出精仕候二付物産学稽古人世話心得可申渡奉存候依之此段申上置候以上 子三月 林式部少輔・開成所頭取」という記載があるので裏付けられる。「友之進」は阿部家の襲名であるため、判別が厄介である。
- (13) 前掲「田中芳男十話・田中芳男経歴談」、一二四―一二五頁。
- (14) 富士宮市教育委員会編「駿州富士郡大宮町角田桜岳日記 五」(二〇〇九年、同市)、一三四頁。
- (15) 東京都教育庁社会教育部文化課編『東京都古文書集』第四卷(一九八六年)、一一四頁。

- (16) 長田庄十郎・清蔵父子については、前掲『石上露子研究』第二輯、第三輯（一九九七年、私家版）。
- (17) 東京大学史料編纂所蔵「静岡藩御達留 一」。
- (18) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料 十』（二〇〇一年、鹿児島県）、四五八頁。
- (19) 『静岡県史 通史編3 近世一』（一九九六年、静岡県）、三二七頁。
- (20) 『久能山叢書 第五編（一九八一年、久能山東照宮社務所）、六〇五～六〇六頁。
- (21) 前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団 第五編（二〇〇七年、羽衣出版）。
- (22) 吉川芳秋『尾張郷土文化医科学史攷』（一九五五年、尾張郷土文化医科学史攷刊行会、五〇六～五〇七頁。原文は『中学世界』第一六卷第八号（一九一三年六月）掲載。
- (23) 『沼津市誌 中巻（一九六一年、沼津市）、二四一～二四二頁、『山中庄治日記』（一九七四年、沼津市立駿河図書館）、九三～九四頁。
- (24) 角山幸洋『ウィーン万国博の研究』（二〇〇〇年、関西大学出版部）。
- (25) 圭介文書研究会編『伊藤圭介日記 第五集、第六集、第十一集（一九九九年、二〇〇〇年、二〇〇五年、名古屋市東山植物園）。
- (26) 『澱粉一覽』について述べたものに、藤本滋生『葛粉（くづこ）一覽』および『澱粉（くづこ）一覽』について（『鹿児島大学農学部学術報告』第三四号、一九八四年）がある。
- (27) 佐々井半十郎については、あさくらゆう「代官佐々井半十郎について」（『足立史談』第四八二、四九三、四九五、四九六、五〇一、二〇〇八～二〇〇九年）、同「代官・佐々井半十郎について―調査の経緯とその重要性―」（『茨城史林』第三三号、二〇〇九年）。
- (28) 齊藤洋一「徳川慶喜とお抱え写真師中島敏次郎―幕府開成所との関係を巡って―」（『日本写真芸術学会誌』第四卷第二号、一九九六年）。
- (29) 上野益三『日本博物学史 補訂』（一九八六年、平凡社）、六三五頁。
- (30) 平野恵『十九世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺―』（二〇〇六年、思文閣出版）、四五頁、三二九頁。
- (31) 東京大学総合図書館所蔵・東京帝国大学五十年史史料No.169「履歴書綴」所収。栗本丹洲については、『江戸科学古典叢書41 千蟲譜』（一九八二年、恒和出版）、『彩色江戸博物学集成』（一九九四年、平凡社）、磯野直秀監修「描かれた動物・植物―江戸時代の博物誌―」（二〇〇五年、国立国会図書館）など。
- (32) 既刊文献の管見の範囲では、資料番号4-17の「笹熊」は、西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵の「本草図説」には同じ図が収録されている。ただし、寛政二年（一七七九）五月下総国小金郷上本郷村で捕獲された「鼬鼠」であるとの栗本の説明文（写）は違っている（荒俣宏監修『江戸博物図鑑三 高木春山 本草図説 動物』、一九八九年、リプロポート、一五頁）。さらに、同じ獣のそっくりな図は、明治
- 一一年（一八七八）に製本された東京国立博物館所蔵「博物館獸譜」（資料番号・和956）にも収録されているが、文字部分の筆跡は丹洲自筆ではなく、図も含め写本であることがわかる。この「博物館獸譜」は、複数の画者による三九九点（うち丹洲画は八点）が複写・スクラップにされ、二冊本にまとめられたものであるが、中には丹洲自筆のものも含まれるが、少なくともこの「笹熊」「鼬鼠」は写しである。資料番号5-17の果実を食べるコウモリは、似た図が「千蟲譜」に含まれており（国立国会図書館所蔵・曲直瀬愛写本、前掲『江戸科学古典叢書41 千蟲譜』、四二八～四二九頁）、やはり同様の転写例である。
- (34) 磯野直秀「江戸時代動物図譜における転写」（山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上、一九九五年、思文閣出版）。

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇一三年二月二〇日受付、二〇一三年五月二四日審査終了)

【史料翻刻】

史料 1

(表紙)

文久二壬戌年より

物産学入学姓名記

物産方

(付箋)「物産学入学姓名記」

戊二月十八日 是迄画学

松山想十郎

尾張殿家来

伊藤圭介惣領倅

伊藤謙三郎

戊四月十五日

御徒頭

(朱書)

本多準之助組御徒

「戊十月十五日世話心得被申渡」

鶴田清次郎

新御番

岡部日向守組

五月十八日

長田歆十郎

(朱書)「戊ノ十月十五日世話心得被申渡」

(朱書)「死除キ」

秋山飭之丞

大御番

五月廿三日

本庄宮内少輔組

新兵衛惣領

小林直三郎

御徒頭

梶田五郎兵衛組御徒

生田源兵衛

除キ 五月廿三日

(朱書)「戊十月十五日世話心得被申渡」

尾張殿家来

伊藤圭介厄介

中野延吉

六月四日

大久保百人組

森川肥後守組同心

平次右衛門養子仮御抱入

除キ 六月七日

(朱書)「戊十二月七日世話心得被申渡」

山田平次郎

七月五日

青山因幡守家来

栄建二男

足立益之助

戊十四歳

八月五日

御徒頭

塚原次左衛門

御持筒頭

| | | | | | | | | |
|-------|--------------|-----------|-----------|---------------------|--------------|--------------|-------------------|-----------------|
| 八月卅日 | 伊奈熊蔵組同心 | 大西亀太郎 | 戌歳十七 | 御留守居 | 松平出雲守与力 | 伝之丞伴無足見習勤 | 岩崎鉄太郎 | 戊二十歳 |
| 御小姓組 | 松平式部少輔組 | 求馬惣領 | 木下権之丞 | 戌歳三十三 | 一 物産学 | 宿所駒込鰻縄手御先手小倉 | 新左衛門組和田小右衛門地面之内借地 | 右洋書調所江罷出修行仕度奉願候 |
| 閏八月四日 | 尾張殿家来 | 伊藤圭介厄介 | 鈴木容庵 | (朱書)「戌十二月七日世話心得被申渡」 | 十二月九日 物産 | 精鍊 | 宿所牛込天神丁 | 新御番 |
| 閏八月五日 | 小普請組 | 松浦彈正支配 | 鉄五郎大叔父 | 佐野季三郎 | 三好山城守組 | 長田庄十郎 | 新御番 | 岡部日向守組 |
| 九月十五日 | 小普請組 | 能勢熊之助支配 | 松居左馬助 | 宿所父一所 | 十一月十五日 蘭学 | 物産 | 長田歆十郎次男 | 長田宗之助 |
| 九月十七日 | 御徒頭 | 梶田五郎兵衛組御徒 | 関半三郎 | 十二月九日 英学 | 物産 | 宿所神保小路 | 新御番 | 村上肥後守組 |
| 十月廿四日 | 除キ 十二月十四日 画学 | 西丸切手御門番之頭 | 鳥山儀右衛門組同心 | 町田孫四郎 | 除キ 十二月十四日 画学 | 鳥山儀右衛門組同心 | 西丸切手御門番之頭 | 鳥山儀右衛門組同心 |

| | | | | | |
|--------------|----------|---------------------------------|-------|--|--|
| 宿所小日向水道町服部坂下 | 物産 | 加藤政司 | 八月十七日 | 宿所駒込竹町組屋敷 | 三宅三郎介 |
| 十二月二十日 | 精煉 物産 | 大御番 本庄宮内少輔組 小林新兵衛 | 八月廿九日 | 宿所本石町壺町目 | 水戸殿医師 将翁伴 阿部春庵 亥十八才 |
| 文久三年癸亥正月入学 | | 小普請組 初鹿野備後守支配 伴国次郎 | 九月朔日 | 宿所牛込南御徒町 | 仙石播磨守組御徒 今村米蔵 |
| 正月廿三日 | | 新御番 岡部日向守組 歛十郎惣領 長田銈之助 | 物産学 | 宿所裏式番町南法眼坂父一所 右開成所江罷出稽古仕度奉願上候 亥九月廿四日 | 奥御医師 玄叔惣領 小川助右衛門 亥式拾五歳 |
| 同日 仏蘭西学 | 物産 | | | | |
| 五月 | | 松平丹波守藩 辻鼎吉 | | | 御徒頭 本多隼之助組 鶴田清次郎厄介弟 鶴田太郎次郎 亥式拾九歳 |
| 六月八日 | | 太田総次郎藩 製煉方世話心得 宮崎尚温 | 物産学 | 宿所駒込徒町 右開成所江罷出稽古仕度奉願候 亥九月廿八日 | |
| | | 御先手 小野治郎右衛門組 | | | |

| | | | | | |
|---------|---------------------|--------|------------------------------|-----|-------|
| 御徒頭 | 宿所麻布長坂 | 正月廿一日 | 宿所下谷和泉橋通三枚橋 | 物産学 | 十月十日 |
| | 本多隼之助組御徒 | | 右者画学所江只今迄稽古罷出候処物産学茂修行仕度奉願候以上 | | |
| 御兵頭 | 長井筑前守組 | 二月十六日 | 宿所 | 物産学 | 十一月八日 |
| | 土肥千之助 | | 四ツ谷内藤新宿式拾五騎組 | | |
| 大御番 | 神保山城守組 | 十月十六日 | 宿所市ヶ谷加賀屋敷土取場 | 物産学 | 十月廿七日 |
| | 遠山安之丞 | | | | |
| 中奥御小姓 | 開成所句読教授出役 | 二月廿八日 | 宿所赤坂三河台 | 物産学 | |
| | 力之助惣領 | | | | |
| 御番医師 | 伊沢勘之助 ^{カッ} | 元治二乙丑年 | | | |
| | | | | | |
| 仁庵伴 | 岡哲之丞 | 二月廿八日 | | | |
| | | | | | |
| 同 | 物産学 青山五十人町 | 二月廿八日 | | | |
| | | | | | |
| 宿所麻布狸穴奥 | 新御番 | 二月十六日 | | | |
| | 大熊勝左衛門 | | | | |
| 新御番 | 三好山城守組 | 二月十六日 | | | |
| | 庄十郎三男 | | | | |
| 新御番 | 長田清蔵 | 二月十六日 | | | |
| | | | | | |
| 小普請組 | 曲渕安芸守支配 | 二月十六日 | | | |
| | 萩野柳次郎 | | | | |
| 富士見御宝蔵番 | 佐山与一郎組 | 二月廿八日 | | | |
| | 半之丞伴 | | | | |
| 白幡新太郎 | | 二月廿八日 | | | |
| | | | | | |

宿所芝森本丁

器械学稽古人

松平美濃守家来

丑八月九日

新御番

御小人伊藤銀三郎地面借地
右者開成所江罷出修行仕度奉願候以上

丑八月六日

宿所谷中日暮

丑五十四才

岡部備後守組

右兼学仕度奉願候

丑五月十九日

物産

桑次郎弟

(袋綴内紙片)「

器械学稽古人

宿所白銀大縄地黒鍬組屋敷内

松平美濃守家来

物産学

酒井五左衛門^印

麻生弼

宿所谷中日暮

丑五十四歳

右兼学仕度奉願候

丑ノ十月廿八日

紅葉山

丑五月十九日

」

御霊屋附

一 物産学

田中仙永

松平修理大夫家来

宿所隼町老丁目

一 物産学

種子島綱輔

上屋敷内

寅六月十二日

二丸御留守居深尾善十郎支配

丑六月七日

丑貳拾貳歳

二丸御小人

紀伊殿家来

一 物産学

鈴木玄之進

一 閏五月廿一日

赤城貞庵

寅三十二才

御賄頭支配

宿所八丁堀岡崎町池田播磨守組田中源十郎
地面内当分住居仕候

裏御台所小間遣組頭

一 物産学

中山八十郎

卯六月四日

宿所青山御手大工町山岸

丑三十六

陸軍奉行並支配

| | |
|---------------------------------------|----------------|
| 次郎右衛門養子惣領 | |
| 一 物産学 | 小野雄三郎 卯二十歳 |
| 宿所浜町蠣壳町養父次郎右衛門一所 | |
| 同七月十日 | |
| 一 物産学 | 水戸殿医師 阿部将翁 |
| 宿所本石町式丁目 | |
| 卯八月四日 | |
| 一 物産学 | 陸軍奉行並支配 原良平 |
| 宿所大久保尾張殿上ヶ地大竹屋敷陸軍 奉行並支配松山惣十郎地面借地住居 | |
| 卯三十二歳 | |
| 同年十一月三日 | |
| 一 物産学 | 尾張殿医師 菊地立伯 |
| 宿所尾張殿市ヶ谷長屋内 | |
| 三月十一日 | |
| 御城御引渡ニ相成 | |
| 六月八日御書付出十日迄ニ身分取極書付可出御達シ | |
| 六月十七日開成所岡野文蔵江引渡 | |
| 同十八日田中芳男鶴田清次江御引渡ト成 | |
| 史料2 | |

(表紙)

慶応二寅年二月中

開成所物産方之者共

伊豆相模駿河辺江被差遣候

節取扱一件帳写

(付箋)「開成所一覽」

| | |
|--|----------------------|
| (朱書)「寅正月廿八日上ル二月三日相下り承附之上同七日返上」 | |
| 和泉守殿 | |
| 開成所物産方出役之者為御用伊豆相模駿河辺江廻村仕候ニ 付御手当等之義申上候書付 | |
| 海軍奉行 | 浅野美作守 |
| 開成所頭取 | |
| 御手当 | |
| 拾五人扶持 | 信州御樽木山支配 千村平右衛門家来 |
| 金十両 | 開成所物産学出役 田中芳男 |
| 高七拾俵五人扶持 | |
| 内五十俵三人扶持 | 本高 |
| 式十俵式人扶持 | 御足高 |
| 同物産学出役当分介 | |
| 鶴田清次郎 | |
| 同物産学世話心得 | |
| 阿部友之進 | |

右者仏国都府ニおひて博覧会之節被差遣候虫類取集為御用、物産方出役

之者伊豆相模駿河辺江被差遣候旨、去ル十八日玄蕃頭殿被仰渡候二付書面之者共差遣可申と奉存候間、右御用中相当之御手当并人馬等被下候様仕度、就而者虫類捕押諸器械并相貯候器類集品等も多分持参仕候二付長持老棹被下置候様仕度奉存候、依之此段奉願候、以上

寅二月

(朱書)

覚

書面鶴田清次郎江御暇代金七両御手当金貳拾七両御扶持方四人扶持老俵人足老人馬老正田中芳男阿部友之進江支度金七両御手当三十兩人足老人馬老正宛被下いづれも御手当金六ヶ月以上右月割を以被下候積、長持之儀者難被及御沙汰候間、諸器械等銘々被下人馬之内を以差繰持参致し候様可被申渡候事

(朱書)「丑十二月廿八日周防守殿斎藤錠三郎ヲ以御下ケ」

丑十二月廿八日大関肥後守承之

浅野美作守承之

丑十二月廿八日

海軍奉行
浅野美作守
開成所頭取

覚

於仏国都府博覧会之節虫類可被差遣間、物産方ニ而來三四月頃迄ニ右品取集候様被取計、委細之儀者小栗上野介菊地伊予守小俣稻太郎可被談候事

(朱書)「寅二月九日竹村讓之助ヲ以上ル」

和泉守殿

開成所物産方出役之者、伊豆相模駿河国辺江被差遣候二付、暇代金并御手当金請取方之儀申上候書付

御勘定奉行江御断

海軍奉行
浅野美作守
開成所頭取

信州御樽木山支配

千村平右衛門家来

開成所物産学出役

田中芳男

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

水戸殿医師

将翁倅

同物産学世話心得

阿部友之進

御書面野之者共此度物産取調為御用伊豆相模駿河国辺江被差遣候二付、清次郎江者御暇代金七両御手当金貳拾七両、芳男友之進江者支度金七両御手当金三拾両宛右御用中被下、何も六ヶ月以上者右月割を以被下候旨、御書取を以被仰渡候二付、陸軍奉行同並之奥印手形を以為請取申度奉存候間、其段御勘定奉行江被仰渡可被下候、依之此段申上候、以上

寅二月

(朱書)「寅二月九日竹村讓之助ヲ以上ル」

一 和泉守殿

開成所物産方出役之者伊豆相模駿河国辺江被差遣候二付
御扶持方請取之儀申上候書付

御勘定奉行江御断

海軍奉行

浅野美作守

開成所頭取

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

書面之者此度物産取調為御用伊豆相模駿河国辺江被差遣候二付、右御用
中御扶持方四人扶持一俵被下候旨被仰渡候二付、陸軍奉行同並之裏判手
形を以為請取申度奉存候間、其段書替奉行江相達候様御勘定奉行江被仰
渡可被下候、依之此段申上候、以上

寅二月

〔朱書〕「正月晦日御勘定所郡司才助江請取答下ケ札之上

二月二日調役山口判平ヲ以御返達」

開成所物産学出役

田中芳男

同

鶴田清次郎

同

阿部友之進

右為御用伊豆相模駿河国江被差遣候旨御断下り候得共先々何村迄と申義
且人馬遣高巨細御認入御差出し可成事

正月

御書面之儀承知候、此度為御用相越候物産方出役之者共儀者平地者
不及申、都而山林川沢等迄探索いたし虫類取集候事故、何村迄相越
候と申儀者前以難差極候間、御書面三ヶ国一円御達有之候様致度、
且人馬遣高之儀者壹人二付馬壹疋人足壹人ツ、被下候様いたし度、
此段及御答候

二月

〔朱書〕「寅二月八日哲輔殿御申渡」

田中芳男

鶴田清次郎

阿部友之進

物産取調為御用伊豆相模駿河国江罷越可申旨和泉守殿被仰渡候間、早々
支度可致候、依之申渡候

〔朱書〕「寅二月十日錦之助殿江申出」

海軍奉行

浅野美作守

開成所頭取

御勘定奉行衆

信州御樽木山支配

千村平右衛門家来

開成所物産学出役

田中芳男

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

水戸殿医師

将翁倅

同物産学世話心得

阿部友之進

書面之者共此度物産取調為御用伊豆相模駿河国辺江被差遣候旨、和泉守殿被仰渡候ニ付而者右国々廻村先々に於て夫々案内之者差出并人馬繼立等差支無之様、御料者御代官、私領之儀者最寄御代官より夫々通達致し候様御取計有之候様致度、且又右国々にて取集候品類時宜ニ寄廻村先より江戸表江相廻し候儀も可有之候間、是又御達置候様致度、此段及御達候

寅二月

御勘定奉行衆

開成所頭取

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

信州御樽山支配

千村平右衛門家来

開成所物産学出役

田中芳男

一同断

一人足壱人

一馬壱疋

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

水戸殿医師

将翁倅

同物産学世話心得

阿部友之進

書面之者共此度物産取調為御用伊豆相模駿河国辺江差遣候ニ付書面之通人馬被下候旨和泉守殿被仰渡候、依之此段御達および候、以上

寅二月

道中奉行衆

開成所頭取

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

信州御樽木山支配

千村平右衛門家来

同物産学出役

田中芳男

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

馬壱疋

被下

一人足壱人

(朱書)「寅二月廿一日御殿番伊藤整作ヲ以差出御目付和田伝右衛門落手之旨申聞」

御目付衆

開成所頭取

開成所調役

同物産学出役当分介

鶴田清次郎

信州御樽木山支配

千村平右衛門家来

同物産学出役

田中芳男

水戸殿医師

将翁伴

同物産学世話心得

阿部友之進

右之者共物産取調御用として伊豆相模駿河国辺江被差遣候旨和泉守殿被仰渡候ニ付来廿六日江戸出立致し候、依之印鑑五枚御廻し申候間、関門江御達有之候様致度、此段御達しおよひ候

寅二月

(朱書)「寅二月廿四日御殿番伊藤整作ヲ以差出亀田三郎兵衛相渡」

御勘定奉行衆

開成所頭取

被下

開成所調役

同物産学出役当分介

一人足壺人

馬壺正

被下

一人足壺人

馬壺正

鶴田清次郎

信州御樽木山支配

千村平右衛門家来

同物産学出役

田中芳男

水戸殿医師

将翁伴

同物産学世話心得

阿部友之進

右之者共此度物産取調御用として伊豆相模駿河国辺江被差遣候旨和泉守殿被仰渡候ニ付右国々海道筋并横街道をも廻村致し候間、人馬継立方等都而差支無之様其筋へ御達相成候様致度、此段及御達候

寅二月廿四日

(朱書)「寅二月廿五日使を以差出小宮善右衛門方江差遣請取書写

来江移置」

御用

先触

開成所

品川宿より

廻村先々

問屋年寄

名主

中江

覚

被下

一人足壺人

馬壺正

開成所調役

鶴田清次郎

押切印

被下

開成所物産学出役

一人足壺人

田中芳男

馬壺疋

被下

同物産学セ話心得

一人足壺人

阿部友之進

馬壺疋

右者物産取調御用として伊豆相模駿河国辺江廻村致し候ニ付明後廿七日
江戸出立いたし候、依之書面被下候人馬差出し、渡船場等都而差支無之
様可被取計候、此先触廻村先々江無遅滞継送、留ケ各宿より開成所江可
被相返候、以上

寅二月

開成所^⑨

品川

川崎

神奈川

程ヶ谷

金沢

浦賀

三崎

豆子

雪の下

片瀬

藤沢

平塚

大磯

小田原

根府川

熱海

網代

和田

浜

湯ヶ野

下田

手石

妻良

松崎

湯ヶ島

北條

沼津

原

吉原

蒲原

由井

興津

江尻

府中

帰路

江尻

由井

興津

蒲原

岩渕

大宮

村山

原

| | | | | | | | | |
|---|---|-----------------------------------|------------------------|--|---|---|---|--|
| <p>沼津 三島 箱根 気賀 湯本 小田原 金子 蓑毛 子安 伊勢原 糟谷 愛甲 アツギ 鶴間 溝口 セ田ヶ谷 右寄村 問屋年寄 名主 中</p> | <p>田中芳男様 阿部友之進様 右者明後廿七日為御用江戸御出立ニ付慥ニ請取、則品川宿へ差越可申候、以上 寅二月廿五日 御伝馬役 小宮善右衛門代 清八印</p> | <p>（朱書）「六月二日別紙添御勘定所杉山金太郎へ相渡ス」</p> | <p>道中奉行衆 開成所頭取</p> | <p>被下 一人足壺人 馬壺正 被下 一人足壺人 馬壺正 被下 一人足壺人 馬壺正 被下 一人足壺人 馬壺正</p> | <p>開成所調役 同物産学出役当分助 鶴田清次郎 信州御樽木山支配 千村平右衛門家来 開成所物産方出役 田中芳男 水戸殿医師 将翁伴 同物産学セ話心得 阿部友之進</p> | <p>於御休泊之義者御用都合も有之候ニ付其場所ニ於テ申付候間、可被得其意候、尤休泊之節木錢米代者当人より御定之通り相渡候筈ニ付其段も可心得候事</p> | <p>（朱書）「寅二月廿五日小宮善右衛門方より差越候請書写」 覚 一御先触 壺通 鶴田清次郎様</p> | <p>書面之者共伊豆相模駿河国物産取調御用相濟、一先帰府致候処、尚又近郷筋へ相越可申旨玄蕃頭殿被仰渡候ニ付、来る四日江戸出立、別紙之通廻村致し候間、此段御達およひ候 月</p> |
| | | | | | | | | |

〔朱書〕「六月二日別紙式通并印鑑五枚添御月番小俣稻太郎へ相渡ス」

御目附衆

開成所頭取

鶴田清次郎

田中芳男

阿部友之進

書面之者共伊豆相模駿河国物産取調御用相済、一先歸府致候処、尚又近郷筋へ相越可申旨玄蕃頭殿被仰渡候ニ付、来四日江戸出立、別紙之通り廻村致候、依之印鑑五枚御廻し申候間、関門江御達有之候様致度、此段及御達候

〔朱書〕「別紙」

物産取調御用

武蔵下総廻村道順

千住 新宿 松戸

但○—— 近村廻り

流山

但○—— 近村廻り

小金ヶ原辺 国分台 八幡

船橋 行徳

右之通り

寅六月

〔朱書〕「別紙」

武蔵国廻村道順

新宿 高井戸 府中

日野 羽邑 新町

飯能 扇町谷 川越

但近村廻り

扇河岸

右之通り

寅五月

〔朱書〕「寅六月七日馬込勘ヶ由江達ス 但し組頭取扱ひ」

印

別紙入

開成所

伝馬町

年寄町

被下

宿所市ヶ谷火之番町□坂上奥田平左衛門方

一人足壱人

開成所物産学出役

馬壱疋

田中芳男

被下

宿所本石町一丁目阿部将翁方

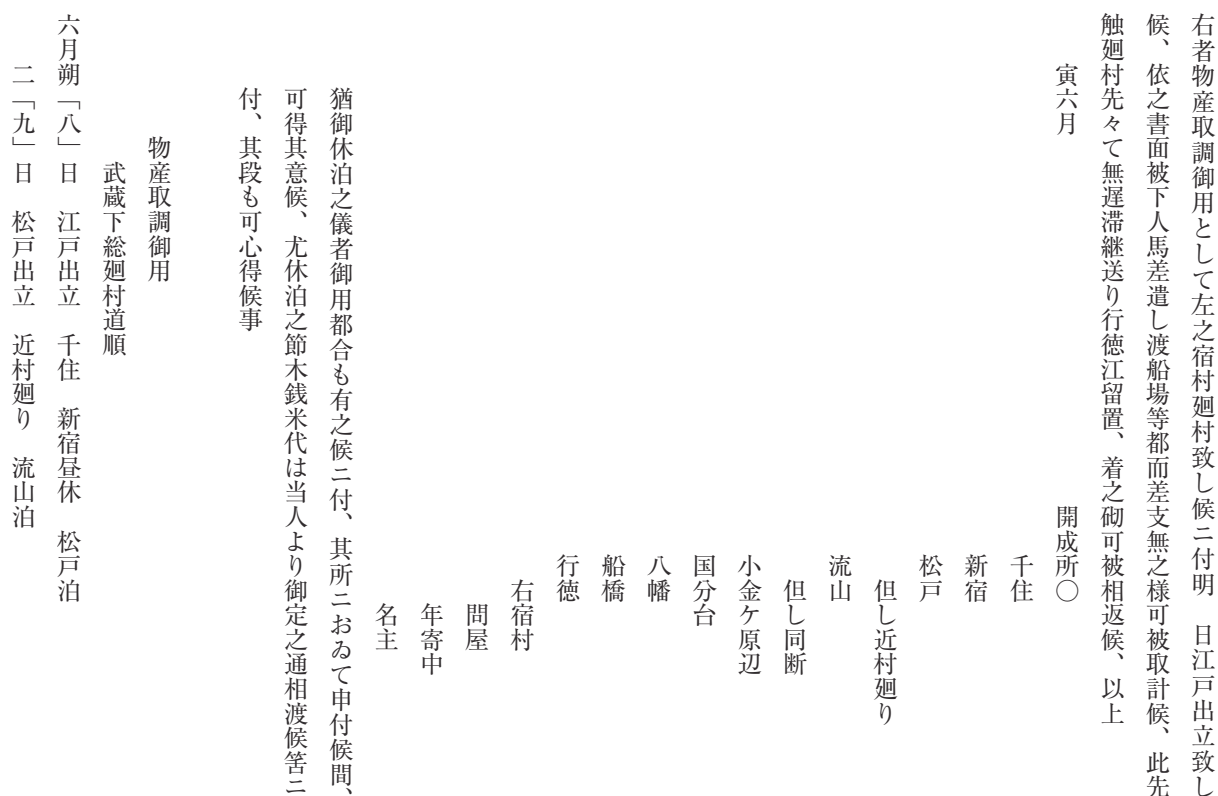
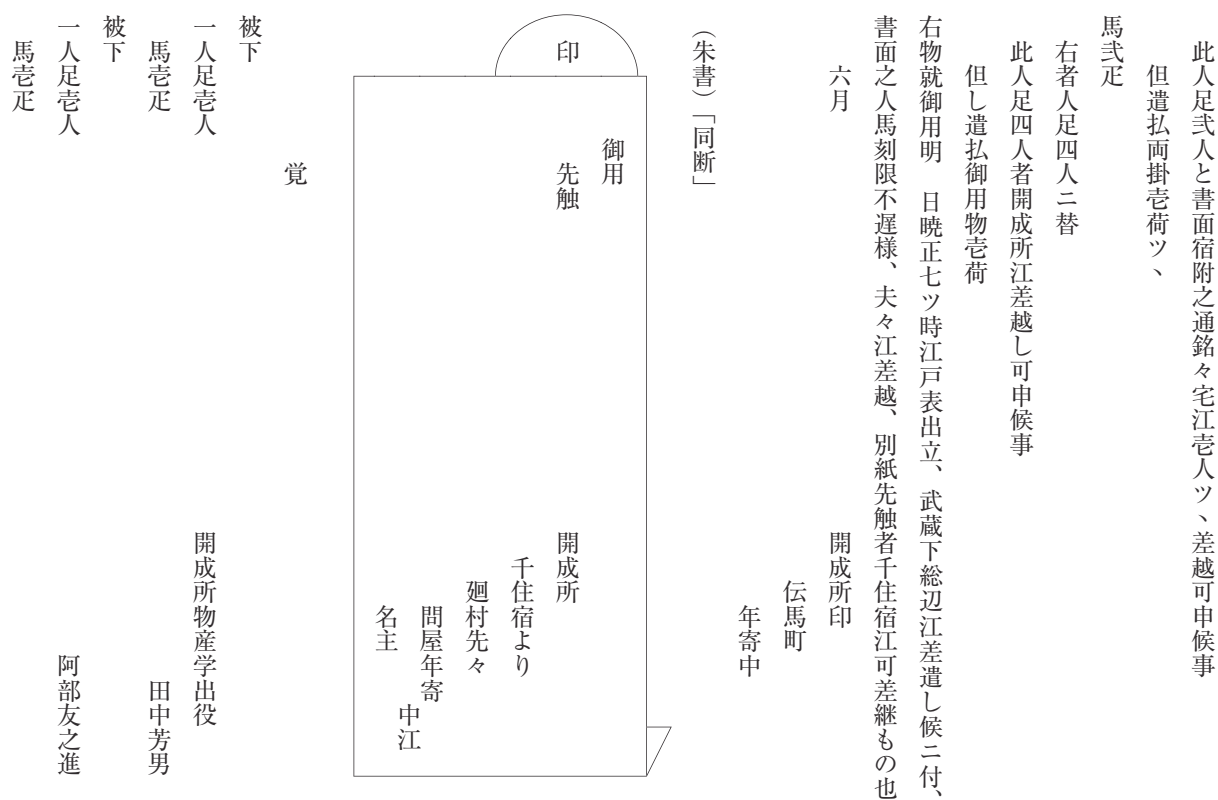
一人足壱人

同物産学世話心得

馬壱疋

阿部友之進

右合人足貳人



| | | | | | |
|---|---|---|--|--|--|
| <p>三「十」日 流山逗留 近村廻り 四「十二」日 流山出立 小金ヶ原廻り 小金泊 五「十二」日 小金出立 国分台 八幡泊 六「十三」日 八幡出立 船橋昼休 行徳泊 七「十四」日 行徳逗留 日夕船に乗り未明江戸着 尤大風雨之節八日送りニ仕候、以上 五月廿四日</p> | <p>武蔵国廻村物産取調御用道順 五月九日 江戸出立 新宿 高井戸昼休 府中泊 十日 府中出立 日野昼休 羽邑廻り 新町泊 十一日 新町出立 飯能泊り 十二日 飯能出立 扇町谷泊 十三日 扇町谷出立 川越泊 十四日 川越逗留 近村廻り 十五日 川越出立 扇河岸より舟にて帰る 尤大雨大風之日八日送りニ仕候、以上</p> | <p>武蔵廻村入用道具 一洪昏状二枚 一組重 大三 五組 一ブリキ箱 ヌカ入 一ツ 一瓶 八寸四本 小二 七寸三本 六寸一本 五寸二本 メ十本</p> | <p>一焼酎 三升 一フラスコ 二本 一網タマ 四本 一継竿 一本 一ブリキ茶入 大一 三本 一小鎌 一挺 小二</p> | <p>一物産方 一物産取調御用 武州廻村持参道具 一組金 大小 五ツ 一ブリキ箱 糠入 一ツ 一硝子壺 一硝子壺 一花鋏 一挺 一錨細引 壺揃 一心切 二本 一箸 三膳 一帽頭針 五遣 一硝子箱 四ツ 一虫籠 三ツ 一土鍋 壺ツ 一網袋 弐ツ 一篩 壺ツ 一小篩 一ツ 一かな盥 壺ツ 一張金 少々 一麻糸 一包 一麴壺 一ツ 一びく 弐ツ 一ざる 壺ツ 一紙箱 一ツ 一羽箒 一ツ 一提灯 壺ツ 一小田原挑灯 一ツ 一腊葉道具一揃 一樟腦 一袋 一地図 一折 一半紙筆反故ドウサ昏帳面類 一竹筒 弐本 一小袋 一桐油昏同袋 一肉壺 一ツ 一字書 一 一三有図説 一冊</p> | <p>一焼酎入フラスコ 三本 一網 三本 一紙サテ 一本 一ブリキ茶入 三本 一小鎌 一挺 一小手 一本 一花鋏 一挺 一錨細引 一揃 一心切 二本 一箸 二膳 一帽子針 五連 一硝子箱 二ツ 一虫籠 四ツ 一土鍋 一ツ 一網袋 二ツ 一かな盥 一ツ 一張金 少々 一麻糸 一包 一び久 弐ツ 一紙箱 一ツ 一羽箒 一ツ</p> |
|---|---|---|--|--|--|

一挑灯 一ツ 一小田原 一ツ 一腊葉道具一揃
一竹筒 式本 一小袋 一地図 一折
一桐油袋 二ツ 一肉壺 一ツ 一桐油紙 一枚
一三有図説 一冊 一洪紙 大小 二枚 一ブリキ入樟脳 一本
一継竿 一本 一半紙筆反故ドウサ紙 帳面類
一ザル 一ツ 一ノリ壺 一ツ 一ボク 少々
一ヌノ袋 二ツ 一スイノヲ 大小 二ツ
一モチ壺 一ツ 一種類 一袋

史料3

(表紙)

慶応二年
物産取調
御用
人馬継立帳
二月 開成所
物産方

水野和泉守殿御渡御書付写

開成所頭取江

壺人二付

人足壺人宛

馬 壺疋宛

物産方

鶴田清次郎

田中芳男
阿部友之進
右之通被した候 覚

物産方三人

一人足三人

内訳

両掛三荷 三人

同

一馬三疋

内訳

壺疋 荷本馬

式疋 人足二替

但此分

御用物壺荷

右之通無遅滞継建可請候以上

寅二月

物産方

鶴田清次郎内

小泉小太郎[㊦]

従品川宿夫

右宿々問屋中

(以下翻刻略)

史料4

(表紙)

(朱書)「寅八月十五日」

雑司ヶ谷御地所「之儀ニ付」存寄「申上候」書「付」

雑司ヶ谷御地所壹万五千坪之處、外圍道筋樹林等有之、且人家も相建可申事故、畑之坪数大抵一万坪位之事ニ御座候「扱」右地所作物之儀者カシルン 亜麻 サルヒヤ デキタリス ヒヨス等地味に應して植附可申候、亜麻は八九月種を下し来五月仁を収む、直ニ二度蒔して再び仁を取る、カシルン八九月床に蒔附け来春二三月苗を分ちて畑に植附け五月花を摘取り其明たる地所は直に大根等之野菜を蒔附可申候、此野菜は大根に限らず何にても五六月より来正月迄に相済候品を植付可申候、サルヒヤ デキタリス ヒヨス何れも葉を摘取候事ニ御座候、右様種ニ植附候事故一万坪之上り高一様に申上兼候得共先カシルン之上り高を以て算当仕候得者地面三坪にて大抵一斤之花を摘取候事故、一万坪之地面にてカシルン花三千斤を収可申候、此扱代一斤銀十匁を相定候得者三千斤にて三十メ目之御益相立可申候、尤も右上り高者荒地開墾後直様産出可仕算定ニ付其後追々御地所肥沃仕候「御地所段々相開候」に従ひ御益次第ニ相増可申候、且萃菓アツプルも植附候事故、是亦両三年之後御益ニ相成可申候

右「様」御地所手入仕候には物産方之者三人各一軒之御役宅に住居致し各二人之小使を召遣ひ御地所之三方に住ミ候而万事世話仕候様仕度、尤「地面広大にて」此人数計にて者世話行届兼候間、兼て「事故此外」植木や人足又ハ百姓様之者召抱置き御地所之「兼而」隅々に住居為致平常者銘々「之」自分之田畑「者自分ニ」為作置候而入用之節日々雇入「可申候」候様可仕候、左候ハ者人夫入用之節者何時ニても間ニ合可申、又右様御地所之隅々ニ住居為致候ハ者第一御取締向も睨と相立、彼は御都合宜敷哉と奉存候、扱右人夫ハ雇入之賃錢ハ六月より来正月迄明たるカシルン畑何坪拝借仕候地代として一ケ年之中幾日之一日雇入候積ニ御座候、「左候得者一ケ年之入用と申候者」間御入費ニ相成候分者小使

給金食料一人ニ付一ケ年金三十「十五」両之積にて六人分合金「九十」百八十両、此外鋤鍬鎌篩桶并に外圍入用之「肥」糞土等「一ケ年」合て金三十両、総計一ケ年金「百貳十」二百十両之御入用「にて」相「済」懸り可申候ニ付「尤」最前申上候三十メ目之内にて右之二百十両相減し残り二百九十両全く御益ニ相成可申候、將小使并召抱百姓之數者都合に因り増減勝手次第第二可「致」仕候

右之通り「勘考致候ニ付」預メ相定メ置候様仕度候ニ付図面相添奉入御覽候、以上

寅八月

物産方

※「」は朱書によつて抹消された文字

史料5

(付箋)「祖父奉職履歴」

先達而開成所江御預替相成居候雑司ヶ谷御鷹部屋明地所江物産所出役之者差遣し為取調候処、右御地所者壹万五千坪余御座候得者外圍道筋樹林等も御座候ニ付田畑ニ為致可申地面者大抵壹万坪位之事ニ御座候、扱右御地所江者カシルン、亜麻、サルヒヤ、デキタリス、ヒヨス等地味に應して為植付可申候ニ付壹万坪之上り高一様に者申上兼候得共先ツカシルン之上高を以て算定仕候得者地面三坪にて大抵一斤之花を摘取候様相成可申候に付壹万坪之地面にて者カシルン花三千斤を収メ可申候、此の扱代金壹斤に付銀十匁と相定メ候得者三千斤にて三拾貫ノ御益相立可申候、尤も右者上高者荒地開墾後直様産出可仕算定に御座候間、其後追々御地所肥沃仕候ニ従ひて御益金次第ニ相増可申候、又萃菓アツプルも為植付可申候ニ付是又両三年之後御益ニ相成可申候、又右御地所手入為致候ニ者物産方之者三人各々一軒之御役宅に住居為致、銘々二人之小使を為召遣御地所之三方に分ち住居為仕候て万事世話為致候様可為致、尤も此人数而已にて者世話行届兼可申候ニ付兼て植木屋人足又ハ百姓様之者

召抱へ置き是又御地所之隅々に住居為致、平常者銘々自分之田畑為作、人足入用之節而已右之者雇入候様可為仕候、左候得者何時にても人足入用之節者間ニ合可申、又右様御地所之隅々に住居為致候得者第一御取締向も耽と相立、彼是御都合宜敷義ニ御座候、扱右人足雇入之賃銭者カミルン等正月植付六月迄に花摘取可申候ニ付、右田畑之明居候間何坪貸渡し候地代として一ケ年之中幾日之間タ雇入候積ニ御座候間、別段御費用相懸り不申候ニ付其外年々御費用相懸り候分者物産方之者ニ附ケ置候小使給金食料共一人ニ付一ケ年金式十兩之積にて六人分合して金百式十兩、此外鋤鍬鎌篩桶並に外囲ひ入用之糞土等合して金三十兩、総計一ケ

年金百五十兩御入用相懸り候得共是も一時に出候義にて者無御座候、将前申上候御益金三拾貫目之内にて右之百五十兩引余候へ者残金三百五十兩者全く御益ニ相成可申候、又最前申上候右御地所内江物産方之者差置可申御役宅普請等之雜費者開成所御用「聞」達之者より為立替置、御地所にて出来候御益金之内を以仕埋メ致し候様可仕候ニ付、是又只今聊も御費へ相懸り不申候間、早々右様為致度候ニ付御地所植物之割付絵図面奉入御覽候、就而先達而より度々願上候右御地所内ニ住居仕候者早々引払方夫々江巖重御「達し被仰付被下候様奉願上候」下知御座候様仕度、左様無之候得者折角右御地所御「預ケ被仰付」渡相成候甲斐も無之、且只今より右御地所開墾為致候へば明年より直様前文之如き御益相立可申候ニ付眼前右之御益金御損失ニ相成可申、旁以御不都合之義と奉存候、依之此段「奉願候」申上候、以上

寅八月

雜司ヶ谷御地所之義ニ付存寄申上候書付、去ル八月中建白仕置候所、今以御引渡無之候処、存寄書に申上候 カミルン當時益々払底にて直段も益々引上ケ——迄ニ相成候付、片時も早く御場所開發致し御益相立候様仕度候、今般田中芳男義仏国博覧会御用被 仰付彼地へ被差遣候得共兼々私共申合見込治定仕置候事柄ニ付芳男留守中迎も私共御引請仕兼々

建白之通御国益相立申度候義ニ付早々嚴重之御達を以て右御場所住居候者共為引払、当年内御引渡ニ相成候様仕度候、左無之候而者明春より之仕付方等も差支候義ニ付右之段御堅察被下、早々御地所御引渡被下候様仕度候、尤芳男出立仕候而人数相減し候得共幸ひ世話心得——儀培養方工者にて至而出精之者故右之——相加へ三人にて相勤候得共聊御差支無之候と奉存候間、存寄書相添奉入御覽候間、早速御引渡相成候様奉願候、以上

寅十一月廿五日

鶴田清次郎

長田庄十郎

史料6

養祖父鶴田歎助死御徒与頭

養父鶴田権兵衛死御徒

祖父馬場市左衛門死一橋屋敷奉行

父馬場儀右衛門死同斷

第五大区小七区 静岡県貫属土族

下谷仲御徒丁二丁目二十四番地寄留

鶴田清次郎

辰五拾式

天保五年七月十八日御徒御抱入被仰付、文久元酉年八月十四日御譜代被仰付、同三亥年十二月廿日開成所調役物産掛り被仰付、慶応二寅年二月物産取調御用ニ付廻村、明治元辰年七月十二日勤仕並、同月十六日当分鎮台府附物産掛り被仰付「拜命」、同年八月廿二日川島宗熾附属御製薬掛り被命、鎮将府附、八月廿六日病氣ニ付御免相願候、駿河国静岡江居移仕被仰付製薬園掛被命「被申付」、明治五申年三月四日博覧会事務局十三等出仕拜命、同六酉年澳國博覧会品物取扱為御用駿遠三巡回仕、同申十月四日帰京仕、同戊年三月三十一日御人減ニ付出仕被免候

史料 7

開成所調役 物産学出役助

高七拾俵五人扶持

鶴田清次郎

内 御足扶持式人扶持

清次郎厄介弟

開成所物産学世話心得

鶴田太郎次郎

弘化元辰年養兄手前二罷在候節、十一月八日於學問所素読御吟味二罷出、同十二月廿五日素読出精二付為御褒美白銀三枚被下置候旨、遠藤但馬守殿御書付ヲ以被仰渡候旨、於學問所御目付桜井庄兵衛中川勘三郎申渡、頂戴仕、文久三亥年三月十一日開成所江罷出、仏蘭西学并物産学修行仕、同九月廿五日物産学稽古人世話心得、頭取井上弥三郎被申渡、元治元子年十二月廿九日物産学稽古人世話心得出精相動候二付為御褒美白銀式枚被下置候旨、頭取申渡、頂戴仕、同二年十二月廿八日右同断出精二付白銀式枚被下置候旨、頭取申渡、頂戴仕候、物産学世話心得當寅年迄四ケ年

史料 8

病院附御藥園掛

鶴田清次郎

席病院附調役之次、役金七拾兩被下之

右平右衛門殿被申渡候二付、申渡之

史料 9

其形ヲ取テ其情ヲ不尽ハ非天下之公平抑物産局駿遠ニ開業之基本ハ全ラ鶴田氏之功ニ寄ル処也当今 天朝ニ物産局有テ其美ナシト今駿州ニ鶴田氏尾州ニ田中氏有事是 皇国之大幸也備考ニ世界之學問漸ク一ト成ントスル時物産学無クハ不可有第一西洋之藥品生育製藥相成候儀ハ彼ノ長

ヲ採テ我短ヲ補シ専務第二ハ御藩中之内追而物産学開業可相成是 皇国之御為ニメ外国与並立スル之一助ナレハ聊之御入費二者難替儀与奉存候今時病院大ニ開ケ 皇国之人民病苦ヲ免レ死亡ヲ遁ル此上之大幸仁慈有ンヤ天下之為ニ盛大ヲ仰望スル処也然ルニ御藥園未タ盛大ニ不至悲哉其基礎ヲ失フト云ヘシ近來幸藥品之種舶來スト雖全其實ヲ行フニ不至是外国ヲ目的ニ人命ヲ預ル道理ニメ無替短才又危キ之大ナル処也若此未異動有之坎左ナクトモ藥価弥益ニ沸騰ストモ藥種無ンハ人命ヲ救フ事ふ能ふ得止高価ヲ費シ其価 皇国之病者ニ押移輕輩之者ハ死ニ至共藥用スル事不能愍然悲痛国之疲弊ニ陷入可申又病院有テ之藥園也藥園有テ之病院ニメ雌雄不可欠乏要藥両全盛大無ンハ不可有小僕元來無學短才其上當春已來之修行ニメ其情ヲ雖不能述広ク言路ヲ被為開候御時世ニ基キ井蛙賤見之過言不憚忌諱聊愚意ヲ申述候抑物産局昨年今開ケ十一月二至附屬僅ニ四名當正月二至修行人始リ三月二至附屬八名當今修行人共十五名ニ至レリ雖然御園中五千坪之内三千坪程ハ麦作之地ニ成レリ是人員未タ足ラサルカ故也諺ニ云草木生育一名百坪ニ限ルト左スレハ十五名ニメ僅千五百坪可成加之多石焦土之惡地ニメ生育不至半善地ニ比スレハ其成功膏壤之違ニメ一際勉強人力ヲ尽サスハ善地トスル事難カルヘシ然ラ況ヤ御人費之為ニ日々更番メ四五人之開業何ソ盛大之期可有ンヤ土地ヲ肥スハ人員之多少ニ寄レリ土地肥スレハ生育盛ン可成盛ンナレハ御園益可成左スレハ自然御失費ヲ補ヒ其上ニモ御益可有之ハ不待論ト奉存候初發分御失費ヲ厭ヒ往々之御園益ヲ不知眼前之小利ニ泥ムハ小人之業ニメ遺憾至極ニ御座候何卒此上猶附屬相増責テハ二十名ニ至ラハ内四人新古ヲ不論撰挙メ肝煎ヲ置キ一類五名ニメ四類ニ分御園中ヲ四ツニ分テ一類何百坪持与極又其内ヲ五ツニ割一名宛之持場ヲ定協力同心勉強候ハ、忽開業之功不費日メ目前ニ顯レ可申是一名之持場定リ候得者精不精速ニ其持場ニ顯レ候間譬如何成ものニ候共人氣奮動互ニ劣ルマジト実地ニ盛業ニ可相成ハ自然之道理ニ御座候然ル上ハ一人二名ニモ勝リ候間日々々々善地ニ相

成十分之生育ハ申迄も無之候又加之御園中廻り三方へ生育物之障り不成
様桑茶之苗ヲ植付候ハ、格別人力ヲ不費メ三ヶ年目迄者年々歳々御益可
相成是亦御失費ヲ補ふ一助ト奉存候唯今之姿ニ而者精不精も目前ニハ頭
レ不申又出役ニ而者未タ進退二ツニメ一定ニ不至自然奮発も薄キ形ニ陥
入可申坎何卒出役ヲ去リ俸金ヲ給リ一名之俸二十金ニ極肝煎四人ハ廿五
金ニ定且揃刻退刻ヲ始規則ヲ確定シ器械ヲ充備シ肝煎已下ニテ一類二一
名宛器械掛ヲ設総テ厳正ニ法則ヲ定若万一肝煎始不勉強不都合之仁有之
節ハ仲ヶ間一同ニテ及説得改心候ハ、無論若其上ニも用ヒザル節者其類
ハ不申及一同書面ヲ以可申立左スレハ放逐スルトモ恨無カルベク亦規則
モ明諒ニ相立可申候且肝煎之儀万事ハ勿論持場迎も平士分ハ一層難地ヲ
引受候程ニ無之而ハ不平ヲ生シ可申肝煎之不都合ハ平士之不都合よりハ
一倍重く致第一行跡ヲ慎ミ若局中不都合生スル時ハ静謐真実ニ取計局中
熟和ヲ專一二心懸候儀一致開業之基本ト奉存候將又病院御葉園局之儀ハ
西洋機會ニ候間尤因循弊習小事ヲ去リ輕便実践ヲ志シ両局役々合體上等
下等ヲ不論水魚之一致ニ候上ハ首尾両全ニメ 皇国第一等之盛業ト成
事愉快此上や候ベキ皇国之御為ニ深く仰望奉伏願候乍然御両局御英斷之
中江前件至愚倉卒之妄言極而御採用相成間敷畏縮仕候得共愚裏之情実不
被為捨偏御熟覽奉冀候恐惶謹言

午

五月三日

鶴田両先生江

二百二十名俸金之儀難叶候ハ、附属出役廿五名被 命内五名ハ順廻ニ
採葉并外用ニ当日者二十名出業五類二分肝煎五名ヲ置キ御園中ヲ五ツ
ニ割余ハ前頭ニ准シ可申坎且二十名之俸金一ヶ年四百廿兩ニ至出役日
当日二十名一兩壹分一ヶ年四百五十兩ニ至候間却而俸金之方少ク殊
ニ人心之一致成業ニ至テハ黑白之相違与奉存候間可相成者本文之趣御

熟考御詳解奉願候此段毛頭も私情ヲ以虚飾吐露仕候儀ニ無之全盛大ヲ
仰望スル処ニ御座候只管御雅量奉希候以上

史料10

(封筒)「 鶴田清次殿

博覧会事務局

」

御差出候澱粉一覽式枚并ニ茶葛草綿著述元調之者之書付共当局ニ有之候
間、正ニ落手仕候也

一名前書五人

茶 小川太七

尾崎伊兵衛

葛布 鈴木陸平

小川東一郎

草綿 池川平一郎

摺立申候御品被下方者一等江三枚式等江式枚三等江一枚と之振合ニ有
之、右五人のものいつれも一等之部江入れ可申哉、又者段階有之差等相
立候哉、御見込之処名前上江何枚何枚と申事御認入可被下

六月十七日

武田昌次

鶴田清次様

本文乍御面倒奉願候

静岡二等勤番組
御葉園附属出役

稲富市郎

表1 鶴田清次関係資料目録

| 番号 | 表題（内容） | 年代 | 差出人 | 宛名 | 形態 | 法量 | 数量 |
|-----|--|---------------------|-------|----|-----|----------------|----|
| 1 | (小動物図絵断巻 前欠) | 文政4. 9. | 栗瑞見拙藁 | | 毛色巻 | 28. 0 × 165. 0 | 1 |
| -1 | ハウチン 又云バチン 仙台侯家蔵図牝 | | | | 毛色 | | |
| -2 | (ハウチン 牡か) | | | | 毛色 | | |
| 2 | (小動物図絵断巻 前後欠) | | | | 毛色巻 | 28. 0 × 135. 0 | 1 |
| -1 | 金貂 | | | | 毛色 | | |
| -2 | (筑前秋月で捕獲されたテンの一種) | (癸未. 臘. 念) (文政6) | 栗丹洲誌 | | 毛色 | | |
| 3 | (小動物図絵断巻 前欠) | | | | 毛色巻 | 28. 0 × 200. 0 | 1 |
| -1 | 貂一種 (御前にて拝観の朝鮮から貢献された山猫毛皮) | | | | 毛色 | | |
| -2 | (堅田侯より贈示された山猫毛皮) | 丁亥. 3. 晦 (文政10) | 丹洲手摸 | | 毛色 | | |
| -3 | 銀鼠 (文政4年2月薩州侍医立花静庵写真) | 文政4. 正. 29 | | | 毛色 | | |
| -4 | 薩州竹鼯 (福岡侯より拝借したヤマネの一種) | 甲申. 初夏. 14 (文政7) | | | 毛色 | | |
| -5 | 銀鼠皮二張 橘宗仙院家蔵云是薩州老侯所賜 | | | | 毛色 | | |
| 4 | (小動物図絵断巻) | | | | 毛色巻 | 28. 0 × 490. 0 | 1 |
| -1 | 鼯中ノ一種也 (モグラの図2) | | | | 毛色 | | |
| -2 | (癸丑春大塚で捕獲されたモグラ) | | | | 毛色 | | |
| -3 | (水戸で捕獲された野鼠の一種) | | | | 毛色 | | |
| -4 | 白鼯鼠 薩州産 | | | | 毛色 | | |
| -5 | ツーシユニケ 蝦夷シヤチリ ムントエリモ | | | | 毛色 | | |
| -6 | 鼯 | | | | 毛色 | | |
| -7 | (リス) | | | | 毛色 | | |
| -8 | (尾を立てたリス) | | | | 毛色 | | |
| -9 | 蕃図栗鼠和蘭インキホールン | | | | 毛 | | |
| -10 | (木の実をかじるリス) | | | | 毛色 | | |
| -11 | (横向きのリス) | | | | 毛色 | | |
| -12 | (斜め前向きのリス) | | | | 毛色 | | |
| -13 | (横向きの笹熊) | | | | 毛色 | | |
| -14 | 笹熊 木貼 (寛政己未5月9日下総小金郷上本郷村で捕獲) | | | | 毛色 | | |
| -15 | (横向きで寝る笹熊) | | | | 毛色 | | |
| -16 | (笹熊の顔・足・足の裏) | | | | 毛色 | | |
| -17 | (横向きの笹熊 備前備中土州ではクロンボウ・和州ではキテンと称す) | | | | 毛色 | | |
| -18 | 田鼠 又ハハタ子ツミ (寛政6年11月池袋村にて捕獲) | | | | 毛色 | | |
| -19 | (寝ている田鼠) | | | | 毛色 | | |
| -20 | 鼠 (御城内にて親視し写す) | 丁巳. 10. (寛政9) | | | 毛色 | | |
| -21 | 地鼠 俗名ナリ又ヒミズ | | | | 毛色 | | |
| 5 | (小動物図絵断巻) | | | | 毛色巻 | 30. 0 × 760. 0 | 1 |
| -1 | 日光山産山根図 (5方向より) | 寛政3. 霜. 17 | | | 毛色 | | |
| -2 | 唐栗鼠 | | | | 毛色 | | |
| -3 | 鼯 (薩州鹿兒島産純白色者) | | | | 毛色 | | |
| -4 | モ、ドリ 二疋之図 | 寛政2. 極. 17 | | | 毛色 | | |
| -5 | ヤマ子 日光産 (2図) | | | | 毛色 | | |
| -6 | 山童子 | | | | 毛色 | | |
| -7 | モ、ドリ | | | | 毛色 | | |
| -8 | 鶯鼠 (ムササビの一種、前向き・背面) | | | | 毛色 | | |
| -9 | (山童子 腹を向けたムササビ) | | | | 毛色 | | |
| -10 | (モモンガ) | | | | 毛色 | | |
| -11 | (横向きのモモンガ) | | | | 毛色 | | |
| -12 | ムサ、ビノ子 (辛亥春水府金砂山にて捕獲・中山氏写真巻中より手写、背中側・腹側) | | | | 毛色 | | |

| 番号 | 表題（内容） | 年代 | 差出人 | 宛名 | 形態 | 法量 | 数量 |
|-------|--|-------------------------|----------------------------|--------------|-----|---------------|----|
| -13 | 蛸（ハリネズミ背面と前後足、文化崎陽鎮台土屋紀伊守もたらす） | | | | 毛色 | | |
| -14 | 八重山島のかわほり 大サ如图（枝につかまるコウモリ） | | | | 毛色 | | |
| -15 | （モミジの枝に顔を隠して下がるコウモリ） | | | | 毛色 | | |
| -16 | （コウモリの小図3態） | | | | 毛色 | | |
| -17 | （果実を食べるコウモリ） | | | | 毛色 | | |
| -18 | （枝にぶら下がるコウモリ） | | | | 毛色 | | |
| -19 | 灰鼠（蝦夷アケケシノ産、背面・腹面） | | | | 毛色 | | |
| -20 | 鼯鼠イタチ | | | | 毛色 | | |
| -21 | 蝙蝠（野州宇津宮産、2図） | | | | 毛色 | | |
| -22 | 伏翼（カラフト産コウモリ・背面、寛政中御道朋頭仙阿弥所蔵医学館薬品会ニ出ス） | | | | 毛色 | | |
| -23 | （伏翼 腹面） | | | | 毛色 | | |
| 6 | 文久二壬戌年より物産学入学姓名記 | （文久2. 2. 18～慶応3. 11. 3） | 物産方 | | 堅毛 | 24. 5 × 16. 5 | 1 |
| 7 | 楓糖説（足立栄建訳「マガゼインアホルン樹の條抜訳」を含む） | 文久2 | 物産方（伊藤圭介訳、「蕃書調所」罫紙使用） | | 堅毛 | 26. 5 × 19. 5 | 1 |
| 8 | 嘉女里與武（文久2年医官高島祐啓インドにて捕獲のカメレオンのこと） | 文久3. 5. | | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 0 | 1 |
| 9 | 独逸文人造牧場の為にせる種子の処置 | 文久3. 9. | 物産局（市川斎宮訳、「蕃書調所」罫紙使用） | | 堅毛 | 27. 0 × 19. 5 | 1 |
| 10 | デ・シーホルト著述日本草木図説目録（慶応2年物産方「英国ニ遣ニ相成種物目録」などを含む） | 文久3. 9. | 物産局（「蕃書調所」罫紙使用） | | 堅毛 | 27. 5 × 19. 5 | 1 |
| 11 | 雑司ヶ谷御鷹部屋跡地絵図面（御役屋敷絵図面朱引之通家作住居） | 元治元. 6. 上旬改 | | | 毛状袋 | 64. 0 × 38. 0 | 1 |
| 12 -1 | 本草図譜目録 | | （「蕃書調所」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 24. 5 × 16. 5 | 1 |
| -2 | 覚（本草図譜原書御役所に預置） | 丑. 5. 12 | 庄十郎改 | | 毛状 | 24. 5 × 16. 5 | 1 |
| 13 | 菊芋考并植法 | 慶応元. 霜. | 信濃田芳男記 | | 堅毛 | 24. 0 × 17. 0 | 1 |
| 14 | 雑司ヶ谷御地所存寄書 | 寅. 8. 15 | 物産方 | | 毛綴 | 24. 5 × 17. 0 | 1 |
| 15 | （開成所へ預替雑司ヶ谷御鷹部屋明地云々につき） | 寅. 11. 25 | 鶴田清次郎・長田庄十郎 | | 毛綴 | 24. 0 × 16. 0 | 1 |
| 16 | 御鷹部屋跡開発地之絵図 | | | | 状毛 | 53. 0 × 75. 0 | 1 |
| 17 | 豆相駿廻村動物写生図 | 慶応2. 3～4. | 田中芳男輯・鶴田清次郎画 | [印]（鶴田蔵書） | 毛色堅 | 27. 5 × 19. 5 | 1 |
| 18 | 豆相駿廻村植物写真 | | | [印]（鶴田蔵書） | 毛色堅 | 27. 5 × 20. 0 | 1 |
| 19 | 伊豆誌稿 物産之部抜萃（豆州志稿巻七・秋山章纂輯） | 慶応2. 3. | 於豆州伊東和田村写之 物産取調御用先 物産方三名所持 | [印]（鶴田蔵書） | 堅毛 | 28. 0 × 20. 0 | 1 |
| 20 | 慶応二寅年二月中開成所物産方之者共伊豆相模駿河辺江被差遣候節取扱一件帳写 | （慶応2. 2～6. ） | | | 堅毛 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| 21 | 物産取調御用人馬継立帳 | 慶応2. 2. | 開成所物産方 | | 横半毛 | 16. 5 × 12. 0 | 1 |
| 22 | 山辺風雨論（著述豆州加茂郡小川住田夫亭愚作） | 慶応2. 4. 7 | 物産方三名 於豆州天城山麓湯ヶ野村写之 | | 堅毛 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| 23 | 礦物学 | | | | 毛堅 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| 24 | （履歴明細短冊） | 辰 | 鶴田清次郎 | | 毛状 | 28. 0 × 9. 0 | 1 |
| 25 | （履歴明細短冊） | | 鶴田太郎次郎 | | 毛状 | 27. 5 × 6. 5 | 1 |
| 26 | （駿遠に物産局開業云々意見） | 午. 5. 3 | 静岡二等勤番組御薬園附属出役稲富市郎 | 鶴田両先生江 | 毛綴 | 22. 5 × 16. 0 | 1 |
| 27 | 席病院附調役之次役金七拾両被下之 | | （平右衛門殿申渡） | 病院附御薬園掛鶴田清次郎 | 毛状 | 15. 5 × 19. 0 | 1 |
| 28 | 日記（末尾に図あり） | （壬申. 3. 20～7. 16） | 鶴田尹房 | | 毛綴 | 18. 0 × 12. 5 | 1 |

| 番号 | 表題（内容） | 年代 | 差出人 | 宛名 | 形態 | 法量 | 数量 |
|--------|---------------------------------|-----------------------|------------------------|----------|-----|----------------------|----|
| 29 | 博覧会御用日記（駿遠三への出張時・絵入り） | (明治 5. 3. 20 ~ 7. 21) | 鶴田 | | 竪毛 | 24. 5 × 17. 0 | 1 |
| 30 | 東海道略名所（慶応 3 年上京時各地の名物・風景などの絵入り） | 明治 18. 12. | | | 竪毛 | 24. 5 × 16. 5 | 1 |
| 31 | 正一位稲荷大明神安鎮之事 | 安政 7. 3. 豊 | 正宮司代正五位伯耆守荷田信成 [印] | 江府鶴田清次郎殿 | 状毛 | 35. 0 × 49. 0 | 1 |
| 32 | (伊豆下田絵図) | | | | 状毛色 | 54. 0 × 40. 0 | 1 |
| 33 | (澱粉一覽茶葛布絵著述の件書簡) | 6. 17 | 武田昌次（「博覧会事務局」罫紙使用） | 鶴田清次様 | 毛罫封 | 27. 5 × 40. 5 | 1 |
| 34 - 1 | (シーボルト氏記念塔設立賛同依頼) | 明治 9. 1. 5 | 取扱人戸塚静海・伊藤圭介 | (鶴田清次様) | 活封 | 13. 5 × 20. 0 | 1 |
| - 2 | 巴威里亜国貴族ヒリップ、フオン、シーボルト氏記念塔ヲ勧進スル記 | 明治 8. 9. | 戸塚静海・伊藤圭介 | | 活 | 28. 0 × 23. 0 | 1 |
| 35 | 経暦日誌 第貳号ノ壹（イロハ順物産事典のような内容） | | 鶴田清次（「草稿用」「農商務省」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 5 | 1 |
| 36 | 経暦日誌 第貳号ノ貳 | | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| 37 | 経暦日誌 式号□□ | 明治 11. 5. | ㊦（鶴田）（「草稿用」「農商務省」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 25. 0 × 18. 0 | 1 |
| 38 | 三冊之内 経暦日誌 第三号 下書簿 | | 鶴田（「草稿用」「内務省」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 0 | 1 |
| 39 | 経歴日誌 完 | | (「草稿用」「内務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 0 × 16. 0 × 4. 0 | 1 |
| 40 | 経歴雑誌 | 明治 16. | 鶴田（「草稿用」「農商務省」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 5 | 1 |
| 41 | 博物局植物園目録 | | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| 42 | 上野公園浅草文庫旧蹟 | | (「草稿用」「内務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 5 | 1 |
| 43 | 葛粉製一覽（他「茶説卷之二」「葛布略説」「葛粉」など草稿類） | | (「博覧会事務局」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 28. 0 × 20. 0 | 1 |
| 44 | □種拵方（他「第五号 雁皮紙製造ノ発端」等草稿） | | (「博覧会事務局」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 28. 0 × 20. 0 | 1 |
| 45 | (日本紙製法図解説草稿) | | (「博覧会事務局」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 28. 0 × 20. 0 | 1 |
| 46 | 鳥獸類剥製大略 | | 博物局 | | 木綴 | 24. 5 × 17. 0 | 1 |
| 47 | 蛸蛭ナメクシラ（他草稿） | | (「草稿用紙」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 22. 0 × 14. 5 | 1 |
| 48 | 花の弁（他草稿） | | 「志誠堂」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 0 × 16. 5 | 1 |
| 49 | 種蒔附季考 | | (「草稿用紙」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 0 × 16. 5 | 1 |
| 50 - 1 | 四季之花 | 明治 16. 6. | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 24. 5 × 17. 5 | 1 |
| - 2 | 花菖蒲（番付表） | | 勧進元吉木翁（他）・堀切村武蔵屋瀧蔵 | | 木状 | 39. 5 × 27. 5 | 1 |
| 51 | 式号ノ三（ソ之部～キ之部草稿） | | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25. 0 × 18. 0 | 1 |
| 52 | 式号ノ四（ユ之部～ヤ之部草稿、付箋「朝顔便名集」） | | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25. 0 × 18. 0 | 1 |
| 53 | 式号ノ五（ヤ之部～モ之部草稿） | | (「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 5 | 1 |
| 54 | 式号ノ六（モ之部～ス之部） | 明治 16. 3. | 鶴田清次（「草稿用」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25. 0 × 17. 5 | 1 |
| 55 | 秋のサフラン | | (「草稿用」「内務省」罫紙使用) | | 毛罫 | 24. 5 × 33. 5 | 1 |
| 56 | 明治十年内国勸業博覧会出品解説 薬品ノ部ニ | | (「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫 | 24. 5 × 32. 5 | 1 |

| 番号 | 表題（内容） | 年代 | 差出人 | 宛名 | 形態 | 法量 | 数量 |
|----|--|---------------------------|--|-----------|-----|-------------------|----|
| 57 | 広益秘事大全 | | (「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫 | 24.0 × 32.5 | 1 |
| 58 | (夏ノ部・秋ノ部・春ノ部・冬ノ部 食品書上) | | (「草稿用紙」「農商務省」罫紙使用) | | 毛罫 | 24.0 × 32.5 | 1 |
| 59 | 第二 乳汁ノ腐敗ヲ防ク法（他） | 明治 15. 10. 8 | 大日本鳩巢会席上演説 蟹川漁史 | | 鉛 | 24.5 × 32.5 | 1 |
| 60 | 江戸歌仙楽我記（写本） | 宝暦 8. 6. | 九阜堂亀山・舞鶴庵林道万興蔵板 | | 毛堅 | 25.5 × 17.5 | 1 |
| 61 | 伝授袋（他「和蘭製葉書」「松前家伝ビルシヤナエン」「秘密伝授記」「万世秘事□」） | (天保 5. 11. 2) | 馬場信周 | | 毛横半 | 14.0 × 20.0 | 1 |
| 62 | 金龍山浅草寺大堂棟札写(元禄 14 年 5 月) | 天保 15. 7. 下旬 | 鶴田氏 | | 毛横 | 33.5 × 12.5 | 1 |
| 63 | (江戸古絵図) | 天保 15. 8. | 鶴田氏尹房写 | | 毛色 | 28.0 × 79.0 | 1 |
| 64 | 天狗鈔修法 | 嘉永元. 3. 25 | 尹房 | | 毛折 | 15.5 × 6.0 | 1 |
| 65 | 阿吽巻口伝 | 嘉永元. 7. 吉 | 尹房蔵 | | 毛横半 | 12.5 × 17.0 | 1 |
| 66 | 武門天狗鈔阿之巻（小笠原信濃守源貞宗在判） | 嘉永 2. 2. 吉 | 尹房（花押） | | 毛折 | 17.5 × 8.0 | 1 |
| 67 | 天狗鈔呼之巻 | | | | 毛折 | 16.0 × 5.0 | 1 |
| 68 | 武門天狗鈔切紙伝（省柳斎） | | 鶴田尹房 | | 毛堅 | 27.5 × 20.5 | 1 |
| 69 | 天満宮御出現寿宝御社縁起 カセキノ宮組ヲカモイ山 | | 鶴田 | | 毛横半 | 12.5 × 17.0 | 1 |
| 70 | 四季料理一覧 | | 鶴田 | | 毛横半 | 17.0 × 12.0 | 1 |
| 71 | 鳥養方 | | | | 毛横半 | 17.0 × 13.0 | 1 |
| 72 | 増補地錦抄 | | [印]（馬場蔵）・[印]（馬場蔵書） | | 毛横半 | 12.0 × 17.5 | 1 |
| 73 | 天正年中御由緒之写（武徳編年集成） | | 甲州御岳衆 | | 毛綴 | 23.5 × 16.5 | 1 |
| 74 | 馭戎慨言序（写本） | (寛政 4. 12.) | (尾張鈴木本腹謹撰他) | | 毛綴 | 24.5 × 17.0 | 1 |
| 75 | (時辰儀定刻活測写本) | 安政 4. 仲秋（天保 9. 初秋） | 佐倉鈴木源太蔵梓（序雲藩小川忠友識・後序佐倉鈴木光尚誌・跋雲藩侍医藤山豊識） | | 毛状 | 23.0 × 320.0 | 1 |
| 76 | 和蘭ノ銀銭（図） | | | | 毛状 | 24.0 × 18.0 | 1 |
| 77 | 徳川家五本御道具之内虎皮ナゲ鞘ノ鎗ノ身（図） | | | | 毛状 | 16.0 × 26.5 | 1 |
| 78 | 北野山喜見院（衣冠束帯人物画） | | [印]（□□湯島） | | 木状 | 16.5 × 11.5 | 1 |
| 79 | 豆州手石阿弥陀仏窟（画） | | | | 木状 | 17.0 × 11.5 | 1 |
| 80 | 一百寿（和歌） | 閏申. | 七十七翁周保書 [印] | | 毛状 | 16.0 × 21.0 | 1 |
| 81 | 長うた | | 源尹房 | | 毛状 | 16.0 × 48.0 | 1 |
| 82 | (一狐皮之弁齋送いたし云々書簡) | | 元川忠彦 | 鶴田清次郎様 | 毛状 | 15.5 × 37.0 | 1 |
| 83 | おほへ帳 | 明治 10. 10. (明治 11. 11. 吉) | つるたうち（大五大区七小区下谷仲徒町四丁目新八番地地主鶴田岳子） | | 横半毛 | 16.5 × 12.5 | 1 |
| 84 | 蕤打学校開業ヲ祝ス | 明治 10. ○. ○ | 蕤打学校馬場信懷再拝 | | 毛 | 24.5 × 34.0 | 1 |
| 85 | (学校への寄付金に対する褒状) | 明治 13. 1. | 東京府庁 [印] | 静岡県士族鶴田清次 | 毛状 | 19.5 × 26.0 | 1 |
| 86 | 下等植物学講本原稿 | 明治 18. 4 ~ 19. 3. | 長野県師範学校教諭鶴田信懷控 | | 毛罫綴 | 22.0 × 14.5 | 1 |
| 87 | 西洋素人料理魚類いろは寿煮方附 | 明治 18. 12. | 九阜堂・[印]（鶴田氏蔵） | | 横半毛 | 12.5 × 16.5 | 1 |
| 88 | 日記 | 明治 20. 9 ~ | | | 横半毛 | 12.0 × 16.0 | 1 |
| 89 | 百合花集 | 明治 26. 10. | | | 毛色綴 | 28.0 × 20.0 | 1 |
| 90 | 百合代償記（倫敦相場云々） | | | | 毛 | 12.0 × 33.0 | 2 |
| 91 | 埵甘度爾列氏分科（植物分類） | | 印（鶴田） | | 毛罫綴 | 23.0 × 16.0 × 2.0 | 1 |
| 92 | 下等植物学 | | | | 毛稿綴 | 25.0 × 16.5 | 1 |
| 93 | 第一篇植物外貌学 附名称学 | | (「東京大学」罫紙使用) | | 毛罫綴 | 25.0 × 17.0 | 1 |

| 番号 | 表題（内容） | 年代 | 差出人 | 宛名 | 形態 | 法量 | 数量 |
|-----|------------------------------------|--------------|-------------------------------------|------|-----|--------------|----|
| 94 | 第二日後鯉類（他） | | （「東京大学」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 25.0 × 18.0 | 1 |
| 95 | 生物学（植物）汎論 | | （「東京大学」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 28.5 × 20.0 | 1 |
| 96 | （植物標本目録か） | | （「東京大学医学部」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 28.5 × 20.0 | 1 |
| 97 | 第一門 裸子（付箋「生理学筆記」） | | | | 毛綴 | 25.0 × 18.0 | 1 |
| 98 | 第二門 被子（付箋「植物学筆記」） | | | | 毛綴 | 25.5 × 18.0 | 1 |
| 99 | （「第十五 鳳梨科」等13～15丁断簡） | | | | 毛綴 | 25.0 × 18.0 | 1 |
| 100 | 郊外遠足野生植物の採集（例言） | 明治41.10. | 編者識す | | ペ稿綴 | 25.0 × 17.5 | 1 |
| 101 | 植物学（写本か） | | | | 毛綴 | 28.0 × 21.0 | 1 |
| 102 | （植物分類表） | | | | 毛鉛 | 160.0 × 54.0 | 1 |
| 103 | （眼科書写本か 前後欠） | | | | 毛罫綴 | 23.0 × 15.0 | 1 |
| 104 | （付箋「横文筆記」） | | | | ペ罫 | 20.0 × 13.0 | 1 |
| 105 | 学校長職務章程（他） | | 四谷大番町三十六番地酒井方滝田鐘四郎（「新潟県尋常師範学校」罫紙使用） | | 毛罫綴 | 28.0 × 19.5 | 1 |
| 106 | （岩崎所有地・軍用停車場・国道・里道予定線等土地図面） | | | | 毛色 | 55.0 × 75.0 | 1 |
| 107 | 清和源氏鶴田家譜 | | | | 豎毛 | 27.5 × 19.5 | 1 |
| 108 | 鶴田系譜 | | | | 豎毛 | 24.5 × 16.5 | 1 |
| 109 | （落合家・鶴田家系図） | | | | 毛状 | 14.0 × 76.0 | 1 |
| 110 | （鶴田家系図） | | | | 毛状 | 24.0 × 125.0 | 1 |
| 111 | （落合家・鶴田家系図・戦国文書写） | | | | 毛状 | 15.5 × 320.0 | 1 |
| 112 | 定（竹木藁縄御用を命じる古文書写） | 乙亥.12.23 | 跡部美濃守・市川備後守奉之 | 落合之郷 | 毛状 | 16.5 × 48.0 | 1 |
| 113 | （馬場家・鶴田家系図） | | | | ペ鉛 | 24.0 × 17.5 | 1 |
| 114 | （落合久左衛門重次に関するメモ） | | | | ペ稿綴 | 25.5 × 36.0 | 1 |
| 115 | （馬場家歴代戒名・俗名没年月日一覧） | | | | ペ罫綴 | 36.0 × 25.0 | 1 |
| 116 | 慶応二寅年二月二十八日町触 仏国博覧会え可差送品書（旧幕引継書写し） | | | | ペ稿綴 | 25.0 × 36.0 | 1 |
| 117 | 博覧会事始め－伊藤圭介のことなど－（朝日新聞文化欄コピー） | 昭和43.4.10 | 馬場信夫（日本医史学会会員） | | コ | 26.0 × 15.5 | 1 |
| 118 | 馬場美濃守信房（刊本写真複写） | （昭和18.10.自序） | | | 綴 | 21.0 × 14.5 | 1 |
| 119 | 伝記鶴田清次郎 武術の部 付水泳書 | 昭和43.12.11 | 編著解説馬場信夫 | | 謄冊 | 21.0 × 15.0 | 1 |
| 120 | 伝記鶴田清次郎 学問の部 博覧会御用日記 | 昭和44.12.15 | 編著解説馬場信夫 | | 謄冊 | 21.5 × 15.0 | 1 |
| 121 | 伝記鶴田清次郎 | | 馬場信夫編 | | 謄冊 | 21.0 × 15.0 | 1 |
| 122 | （和服・髻姿鶴田清次額入写真） | | | | 写真箱 | 22.5 × 17.0 | 1 |
| 123 | （和服・髻姿鶴田清次キャビネサイズ写真） | | | | 写真 | 17.5 × 12.5 | 1 |
| 124 | （花菱紋和服・丁髷男性肖像画） | | | | 画 | 49.5 × 32.0 | 1 |

【形態欄の略記】 状：一枚ものの近世文書 豎：豎帳 横：横帳 横半：横半帳 冊：冊子 綴：綴られたもの 巻：巻かれた状態のもの
毛：毛筆で墨書されたもの ペ：ペン書き 鉛：鉛筆書き 謄：謄写版 活：活版 コ：電子複写によるコピー
色：着色があるもの 罫：罫紙 封：封筒入り 箱：箱入り

表 2 「豆相駿廻村植物写真」の内容

| 配列 | 記載名称 |
|----|--------------------------------|
| 1 | ハマナシ 富士方言 コケモ、越橘 |
| 2 | ガクウツギ 一名コンテリギ |
| 3 | スギラン 豆州天城山産生於古木朽処 |
| 4 | トベラ 海桐 |
| 5 | カラスヤマモ、伊豆方言 ヤナギイチゴ |
| 6 | コメツ、ジ |
| 7 | イスカヤ 粗榧 |
| 8 | カヤ 榧 |
| 9 | チドリノキ |
| 10 | 地衣草 |
| 11 | ドクウツギ |
| 12 | コマメウツギ |
| 13 | クワガタサウ 丙寅四月朔日天城山採葉之一 |
| 14 | 杜衡 |
| 15 | ムシクサ 蚊母草 豆州産 |
| 16 | サイカチ 「白の下に七」 莢 |
| 17 | カンアフビ 杜衡 |
| 18 | ソクシンラン |
| 19 | ヤマクス |
| 20 | イツセンリヤウ 杜茎山 |
| 21 | 馬兜鈴 |
| 22 | スナヒキグサ |
| 23 | ハマドクサ 子コノシタ |
| 24 | ハラン 一葉 |
| 25 | ヒメカウゾ |
| 26 | アリドホシ 虎刺 |
| 27 | 櫻櫚 |
| 28 | ツタウルシ 野葛 |
| 29 | ツリガ子カヅラ 一名ハンシヤウヅル |
| 30 | ヤマモ、楊梅 |
| 31 | ソゲキ 伊豆方言 |
| 32 | アスナロノヤドリギ 羅漢栢寄生 駿州富士山下ノ村上井戸村之産 |
| 33 | マタ、ビ 本天蓼 |
| 34 | タウゲシバ |
| 35 | スノキ |
| 36 | アサクラサンシヤウ 蜀椒 駿州産 |

| 配列 | 記載名称 |
|----|----------------------------|
| 37 | シラクチカヅラ 榧榧桃 豆州天城山産 |
| 38 | 榧榧桃 相州大山産 |
| 39 | ヤマシャクヤク 草芍薬 |
| 40 | サイハイラン 豆州天城山方言イモバツクリ |
| 41 | エコ 齊墩果 豆州天城山産 |
| 42 | ツルマサキ 扶芳藤 |
| 43 | ハマハタザホ |
| 44 | マキ 羅漢松 |
| 45 | ミヅキ |
| 46 | チリツバキ 晩山茶 |
| 47 | アブラギリ 「貝2つの下に缶」 子桐 ドクエ |
| 48 | イハナンテン 相州箱根産 |
| 49 | フタツバクサ 豆州天城山 駿州富士山麓 相州箱根山等 |
| 50 | カヤラン 四月於豆州子ッコ峠採之 |
| 51 | 子バツ、ジ 一名モチツ、ジ 四月於伊豆採之 |
| 52 | ウバメカシ |
| 53 | 豆州手石村三島社林之産 慶応二年丙寅四月十二日採之 |
| 54 | チドリノキ |
| 55 | シマサクラ 伊豆方言 |
| 56 | オホルリサウ |
| 57 | フウトウカツラ |
| 58 | ナギ 竹栢 |
| 59 | 和実梅 駿州府中産 |
| 60 | イテウウキクサ 生於水田中 駿河方言ヤリクサ |
| 61 | マツツゲ 松寄生 |
| 62 | キムラタケ 駿州富士山麓深林中之産 |
| 63 | ハマウツボ 相州糟谷村路傍草中之産 |
| 64 | バライチゴ |
| 65 | シラカ子サウ 駿州富士山麓深林中之産 |
| 66 | ユヅリハ 交譲木 |
| 67 | イヌツゲ |
| 68 | イヌツゲ 柞木 |
| 69 | イヨゾメ 莢蓼 |
| 70 | テイカ、ツラ 絡石 一名クチナシカツラ |
| 71 | ヤマムラサキ |
| 72 | コバンモチ 豆州子ッコ越産方言モチ |
| 73 | イヌモチ 駿河方言 フクラシバ |

表 3 「豆相駿廻村動物写生図」の内容

| 配列 | 記載名称 |
|----|---------------------------------|
| 1 | 井ノシリ 房州ニテシリコダマトモ 相州金沢産 慶応二年三月一日 |
| 2 | ジヒカゼ 即ヒザ、ラガヒ 三月二日 |
| 3 | シラス 鷺毛魚 相州浦賀産 三月四日 |
| 4 | ヒトデ 海盤車 三月五日 |
| 5 | ウミギス 相州浦賀 三月五日 |
| 6 | ナマコ 一種 三月五日 |
| 7 | イソシャグマ 相州産 三月五日 |
| 8 | イソツビ 菟葵蓐 相州産 三月五日 |
| 9 | イソツビ 一種白足緑身者 相州産 慶応二年寅三月七日 |
| 10 | グミ 相州方言 三月七日 |
| 11 | ナマコ 一種 三月七日 |
| 12 | ウツラガイ 伊豆産 三月 |
| 13 | ドクギヨ 豆州伊東和田村之産 |
| 14 | サンショウラ 豆州天城山溪水之産 四月 |
| 15 | (昆虫) 伊豆産 |
| 16 | ダニ 牛蝨 天城山産 |
| 17 | ダニ 駿河産 |
| 18 | 金亀蟲 豆州天城山麓湯ヶ島村産 |
| 19 | ダイコクムシ |



「文久二壬戌年より物産学入学姓名記」
(資料番号 6) のうち、鶴田清次郎の箇所



鶴田清次 (資料番号 123)



「豆相駿廻村動物写生図」
(資料番号 17) のうち



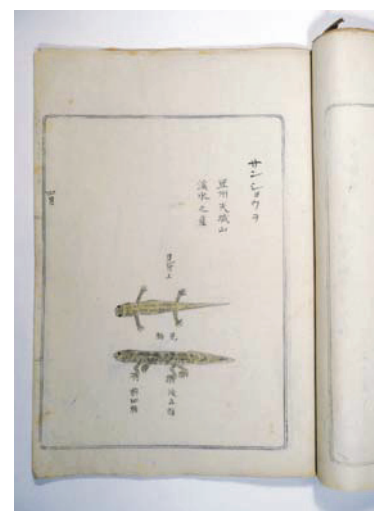
「豆相駿廻村動物写生図」
(資料番号 17) のうち



「豆相駿廻村植物写真」
(資料番号 18) のうち



「豆相駿廻村植物写真」
(資料番号 18) のうち



「豆相駿廻村動物写生図」
(資料番号 17) のうち



栗本丹洲画小動物図(資料番号1)のうち、ハウチン



栗本丹洲画小動物図(資料番号2)のうち、筑前秋月で捕獲されたテンの一種



栗本丹洲画小動物図(資料番号3)のうち、堅田侯堀田正敦から示された山猫毛皮



栗本丹洲画小動物図 (資料番号 4) のうち、笹熊



栗本丹洲画小動物図 (資料番号 5) のうち、長崎奉行土屋紀伊守から送られたハリネズミの毛皮



栗本丹洲画小動物図 (資料番号 5) のうち、ムササビ

鶴田清次・佐々井半十郎撰／中島仰山画『葛布一覽』
明治 5 年刊・8 年校訂 沼津市明治史料館蔵

鶴田清次・佐々井半十郎撰／中島仰山画『草綿一覽』
明治 5 年刊 沼津市明治史料館蔵

岩崎灌園著／小野職慈校閲／鶴田清次補正・出版
『本草図譜 山草部』の扉 明治 17 年刊
沼津市明治史料館蔵

鶴田清次誌・服部雪斎画『澱粉一覽』
明治 7 年刊 沼津市明治史料館蔵